第12回　教育文化研究所教育シンポジウム
第７回　高等学校教育研究所シンポジウム　記録集

『入試が変わった！高校はどう変わる？』

シンポジスト

- 河　村　佳　行（平塚市立大住中学校教諭）
- 石　田　和　夫（神奈川県立平塚工業高校教諭）
- 奥　山　　久（神奈川県教育庁管理部総務室室長代理）
- 鈴　木　　彰（神奈川県教育庁指導部高校教育課主幹）

コーディネーター

- 黒　沢　惟　昭（東京学芸大学教授）

日　時：1998年11月７日(土)

会　場：かながわ労働プラザ３Ｆ　多目的ホール

神奈川県教育文化研究所

開　会

司　会：皆さん、こんにちは。今日はたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。これより、第12回教文研教育シンポジウム、第7回教育研究所シンポジウム、「入試が変わった！高校はどう変わる？」というタイトルで開催したいと思います。

今回初めて小・中の研究所であります教文研と、高校の研究所であります教育会館・教育研究所がタイアップして主催ということになりました。従いまして会場には、小・中・高の先生方がおそろいになっていると思いますので活発な意見交流を期待しております。

それでは次第に沿いまして、主催者あいさつということで、神奈川県教育文化研究所所長稲垣卯太郎さん、それから神奈川県高等学校教育会館・教育研究所代表杉山宏さん、この両名の方から頂きたいと思いますので、よろしくお願いします。

主催者あいさつ

稲垣県教文研所長：こんにちは、県の教文研の所長をしております稲垣です。

きょうは、私たちの主催致しますシンポジウムに、お寒い中をお集まり頂きまして、ありがとうございます。

私の所属する教育文化研究所と、高等学校教育会館・教育研究所とは、すぐそばに住んでいるんですけれども、シンポジウムを共同で開催することは今回が初めてであります。そこで共通の話題ということで、神奈川の後期中等教育を取り上げることになりました。

たまたま高等学校の入学者選抜制度が新しい制度になってから3年目を迎えますし、少子時代を迎えて、県立高校の将来構想をどうするかということが、県の県立高校将来構想検討協議会から最終答申が出された時期でございます。したがって、入試と将来構想を話題としてシンポジウムをやりたい。それにはやはり行政からも参加してほしいということで、県教育委員会にお願いしたところ、快くシンポジストとしてご参加を頂きました。中学側、高校側、そして行政、三者がそろってシンポジウムができることは画期的なことでありますし、教育の先進県と言われる神奈川ならではと考えているところであります。

コーディネーターの黒沢さん、シンポジストの皆さん、そして会場の皆さんのご協力によりまして、このシンポジウムが成功することを心から祈念致しまして、簡単ですけれども、あいさつと致します。よろしくお願い致します。（拍手）

杉山高等学校教育会館・教育研究所代表：私は、高等学校教育会館の方の教育研究所の杉山でございます。

こういう席で2人も続けてあいさつというのは、ちょっと今時ではないんじゃないかと思いますが…、二つの研究所でこういった催しを共催するということになりました経緯は、ただいま稲垣さんの方からお話がございましたので、そこはもう省略しておきたいと思います。

今日の話題になっております高校入試の問題、あるいは高校教育の問題、こういうような問題は、一つひとつ取り上げて静止した状態でじっくり観察したり、考えたりという形の行き方も当然行わなければいけないことだと思いますが、私どもがつくり上げている社会の事象というのは、同じ次元で広がりがあったり、あるいは時の連続の中で生まれてくる。あるいはさらに成長していく。そういうことがございますので、流れの中でものを見るという形もあわせて一つやって頂ければと思っております。今日の話し合いもそういうような形であればありがたいなと考えているところです。

私どもの研究所も、本日のこのシンポジウムを行うということがわかりましてから、ある程度お尋ねの電話を頂きました。きょうのシンポジウムに対するお尋ねと合わせまして、「おたくの教育研究所はどういうことをやっているんですか」と、そういう質問もございました。そういう

やりとりの中で、「なぜ教育研究所なんていう名前にしているんですか」ということが、ちらっとお話の中に出てまいりました。もっとも、そのことについてお話し合いをする前に話がどんどん別の方にいってしまって、電話が切れてしまいましたので、その件はそれで終わってしまったんですが、どうも受けた感じですと、教育研究所なんていかめしい名前に何でしているんですかと、そういう意味のように受け取れました。

しかし、私どもは日ごろ教育研究所、教育研究所と言っているもんですから、改めて何で教育研究所と言うんですかと言われたときに、一瞬「えっ!?」という感じが致しました。人間、物の考え方はできるだけ客観的に考えようと思っても、やっぱり自分の立っている基盤があるので、おのずから考え方というのはどうしても幅が狭くなってしまうことが多いと思います。ある人にとって当り前のことが、他の人にとって不思議なことも多いと思います。せっかくのこういう機会ですので、いろいろな立場の方から、いろいろなご発言を頂ければと願っております。

きょうの後半は、フロアの方からも活発なご意見を頂きたいと思います。よろしくお願い致します。(拍手)

司　会：ありがとうございました。

この後のかじ取りは司会者の黒沢先生にすべてお任せしますので、会場の方の意見も取り入れながら、すばらしいシンポジウムをお願い致します。

それでは、よろしくお願いします。

黒沢（コーディネーター・東京学芸大学教授）：紹介頂きました黒沢です。どうぞよろしくお願いします。

主催者側のごあいさつにもありましたように、高校の先生方と、義務教育の先生方が一緒になり、また、行政側の方々と現場の先生方が一堂に会して討議を行うことは、考えてみるとちょっと不思議ですけれども、これまでなかったようです。今日はそのスタートラインということで、大変期待をしています。教育研究者として又県民の一人として非常にうれしく思っています。

ただ、コーディネーターという大変重要な任を私が果たせるか不安も大きいのですが、シンポジストの皆さんを初め、会場の皆さんのご協力によりまして、これからの改革のステップになれば、大変うれしいと考えています。そして、ご参加の皆さんも最低一つは参加してよかったという思いを持ってお帰り頂ければ、私としては大変うれしいなと思います。

こう考えますので、余り細かい点について問い質すというふうにならないで、できれば現在の高校入試の仕組みと改革のポイントが、問題点も含めてよりよくわかるような、そういうことを今回の目的としています。さらにできればそれだけにとどまらないで、今後の高校のあり方を一般論ではなく、具体的に話が進めばありがたいと思います。その期待がどこまでうまくかなうかは、私の力と、皆さんのご協力に待つしかありません。

まずは、タイムスケジュールを、予め簡単にお話します。

最初に今日の問題点について私の考えを述べさせて頂きます。その後、シンポジストの４人の方から時間が少なくて恐縮ですが、10分程度でそれぞれの立場からのご意見を頂くことにします。従来のシンポジウムですと、そこですぐ会場の方からご意見を頂くということになるのですが、今回の事前の取り決めでは、まずコーディネータの私の方から若干の質問をし、その後に再びシンポジストからそれを組み込む形で、10分では話せなかった内容を敷衍したり、補足して頂きたいと思います。それで前半部分は一応終わりに致します。

予定としては大体３時40分ごろから、会場の皆さんの方からご意見を頂いて、私の方でアレンジして質疑応答を続けるという形で進めたいと思います。

最後にコーディネーターとして私がまとめることになりますが、まとめることができるか大変不安です。感想程度になるかもしれませんけれども、次回へ続いていくという意味で、何とか頑張りま

す。この会場の関係で、閉会の言葉を含めて4時45分には終わりたい、いやどうしても終わらなければいけないという約束になっておりますので、皆さん、恐らく興奮されていろいろしゃべりたい方が、いや興奮されなくても、しゃべりたい方が(笑)いっぱいいらっしゃるかと思いますが、ぜひ時間の制約のご配慮をお願いします。

それでは本日のテーマの論点について私の考えを申し上げます。

顧みますと、戦後しばらくの間、私どもが育った青少年時代は日本全体が貧しくて、いわゆる「配給品」だけで満足していた時代でした。しかし、日本が高度成長を遂げて以来、非常に豊かになりました。そのため、配給品だけではなかなか満足できない人々が多くなった。つまり、「個性化」とか、「自由化」という流れが出てきました。そうした風潮のなかで、学校の「個性化」、「特色づくり」が高校についてもいわれるようになったのです。入口である入学試験、選抜についても多様化、個性化、特色化が出てきたのです。

そして、私どもの貧しい時代の「平等」ではなくて、平等ももちろん尊重するんですけれども、いわゆる形式的な平等、みんなが全く同じという画一という「平等」ではなくて、多様化によって実質的な平等を図っていこうという流れが、高校問題、入学試験の場合にも出てきたのだと思います。私は、そういう考え方自体は基本的には賛成ですけれども、しかし、現実の学校現場の中で、果していわれる通りになっているのだろうかということも問われなくてはなりません。臨教審以来、そうした多様化の流れが加速度的に出てきていると思います。

ところで、その後に14期中教審が答申を出します。この中教審は高校問題を集中的に扱ったことで有名です。その中で、日本の高校問題の一つが「学校間格差」にあるということを指摘しました。この指摘は私の考えていることと一致します。大変興味を持って何回もその答申を読んだことを想い出します。

ところで、その格差の是正については、従来は、学区を縮小するとか、総合選抜の実施によって実現を図ろうとしたのです。これらの方法は格差是正にかなり効果があったと思います。けれども、14期中教審は、格差の是正ということは提言したけれども、具体的な方法としては学区の縮小とか総合選抜は全く触れなくて、むしろそういう方法には否定的だったと思います。そうではなくて、多様化をどんどん進めていくことを提言しました。つまり、生徒が多様化し、保護者の価値判断も多様化していくことに対応して学校の内容も、入学試験の方も一層多様化していけば、多様な選択を推進すれば、それによって学力（偏差値）による一元的格差というものは次第になくなっていくだろう。こういう処方箋でした。

そういう流れの中で、本県の入試選抜も、改革としては全国的に見れば、かなり遅れて実施されたのですが、総合的選考とか複数志願制が実際に行われたのです。

その総合的選考が、私が先ほど申しました特色づくりとか、個性化という流れの中で出てきた具体的な選抜の方法なんです。この方法の理念と、現実は果してどうなっているのかということが今日の一つの論点です。

もう一つは、皆さんもご承知のように、第1希望と第2希望、いわゆる複数志願制度ですね。これについても現実は先に説明したような理念どうりになっているのかどうかを検証したいと思います。先程言いました総合的選考と併せますと二つでございますけれども、一応この二つに的をしぼって高校の立場、中学の立場、そして行政の立場からの主張をかみ合わせながら論議を進めていきたい、こんなふうに考えていますので、よろしくお願い致します。

それでは、以上のような背景を考え、二つの論点に絞りながら各シンポジストから順にご意見を承わって参りたいと思います。

順序は、こちら側から紹介しますと鈴木さんです。神奈川県の教育庁指導部高校教育課の主幹です。鈴木さんから最初にご意見を頂きたいと思います。2番目は奥山さんです。神奈川県の教育庁

管理部総務室室長代理です。３番目は、平塚市立大住中学校の河村先生、最後は、県立平塚工業高校の石田先生、以上の四方です。よろしくお願いします。それでは鈴木さんからどうぞご発言下さい。

鈴木　彰（県教育庁指導部高校教育課主幹）：改めまして、高校教育課の鈴木でございます。よろしくお願い致します。

私、今日３点ほどお話をさせて頂きたいと、こう考えております。まず第１点でございますけれども、入試制度の改革の流れということでお話をさせて頂きまして、第２点でございますが、入試制度の概要、第３点目と致しましては、２回実施されました新制度の検討につきまして、アンケートをもとにして若干お話をさせて頂くということでございます。よろしくお願いしたいと存じます。

まず第１でございますが、入学者選抜制度、入試の制度の改革の流れでございますけれども、これにつきましては、平成３年10月に設置されました神奈川県高等学校教育課題研究協議会という非常に長い名称でございますけれども、略して高課研と言っております。まずこれからお話をさせて頂かなければいけないかと、こう思っています。

報告が出されたのが、平成５年の12月でございまして、報告の概要につきましては、大きく分けまして２点ございます。まず第１点は、選抜資料の見直し、第２点につきましては、多様で弾力的な選抜方法です。これが報告の骨子かと考えています。

まず、第１点目の選抜資料の見直しにつきましては、学習検査、つまり、ア・テストでございますけれども、これにつきましては選抜資料としない、という報告でございます。それから学力検査につきましては、多様で弾力的な扱いができるようにする。それから選抜資料ですが、調査書と学力検査の結果については、両者が均衡がとれるようにするといった報告を受けてございます。

第２点目でございますけれども、多様で弾力的な選抜方法ということで、ここに受験機会の複数化等ということで報告されてございます。「等」と言いますのは、受験機会の複数化や、受験生の希望により、第２希望を認めるといった志願のあり方について積極的に検討する必要がある、ということでございます。それから、選考の方法につきまして、各高等学校独自の判定方法をあらかじめ公にして実施することが望ましい。こういった２点につきまして報告がございました。

この報告を受けまして、平成６年１月の段階で、教育庁内に教育長を委員長と致しまして、公立高校入学者選抜制度検討会議といったものが設置されました。そして平成６年７月18日に、神奈川県公立高等学校入学者選抜制度改正大綱が制定されたということでございます。

この制度の制定の趣旨ですけれども、報告書の引用の部分を読まさせて頂きます。まず一つてございますが、生徒一人ひとりの個性や能力、適性を多面的にとらえ、調査書の評定や学力検査などのいわゆる数値のみではなく、生徒の特性や、長所に着目した選抜制度とすること。２点目でございます。そのために生徒一人ひとりが自らの進路希望に基づいて学校選択ができるような選抜制度であること。こういう２点が制度制定の趣旨でございます。

この趣旨を踏まえまして、選抜方法として、志願に当たりましては、第１希望及び第２希望の二つの高校を志願することができる。それから第１希望の募集人員は入学定員の80%、第２希望の募集人員は入学定員の20%、つまり、一つの学校を80と20、こういう枠を設けるということでございます。それから学力検査につきましては、１回ということを定めたわけです。

それから選考の方法と致しまして、調査書の評定と学力検査の比率につきましては６対４とする。高課研の報告では、均衡がとれるようにということでしたけれども、その比率につきましては、６対４ということで定めてございます。

第１希望の選考の方法につきましては、調査書の評定及び学力検査の結果に基づき、第１希望の募集人員の70%までを合格者と決定する。つまり、従来の数字のもので合否を決めていくということでございます。それからその後の30%につきまし

ては、調査書の評定、それから学力検査の結果、調査書の評定意外の記載事項を活用して総合的に選考する。こういう制定をしたわけでございます。

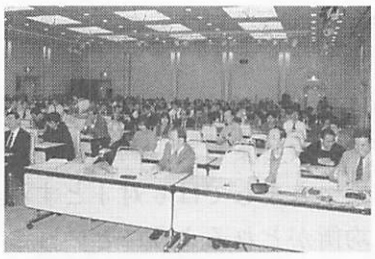
第２希望の選考につきましては、残り20%の合否ですけれども、これにつきましては、第１希望の30%の選考と同じように総合的な選考をするということでございます。それに基づきまして、実際入学者選抜の実施要領といったものを定めながらきたわけでございます。

すべて説明すると大変でこざいますので、定時制・通信制につきましては、従来どおり１校志願ということでございます。全日制につきまして、特に普通科の説明をさせていただきます。

中学校、それから高等学校の先生方には、この制度はもう十分ご理解を頂いているわけですが、本日は小学校の先生もいらっしゃいますし、ご父兄の方も参加されているということですので、説明させて頂きます。

一般入試の志願のところから説明致しますが、第１希望と第２希望の２校を志願します。つまり、この部分は複数志願制と言われるかと思っております。ただし、同じ学校を第１希望、第２希望校とすることができるということでございます。

学力検査は、先ほど申し上げたとおり、１回でございます。これにつきましては、第１希望校で１回のみの受験ということになります。普通科については５教科、その他の専門学科等につきましては、３～５の教科数で学校が定めるということで受験することになります。



選考でございますけれども、普通科の選考方法については、仮に定員を100名という形でお考えになって頂きますと、100名のところを80名と20名という形で定員を分けてございます。そのうちの70%（全体の56%）については、いわゆる６対４の数字だけで選ぶということでございます。残りの部分につきましては総合的選考ということですが、これにつきまして若干説明をさせて頂きたいのは、まず第１希望で、その総合的選考の対象者になるのは、６対４に並べたものを、定員のところで一たん合否の判定をしまして、101名以下の生徒さんについては、その時点で不合格、第２希望の学校へ回される形になります。残った44名から24名を総合的選考によって選び出す。こういう形でございます。

不合格になった生徒さんにつきましては、第２希望校の方の選考の対象者になります。第２希望校につきまして、志願が非常に多い場合は、学校長の判断で、ある点数で、一部切り、まずその辺で合否の決定をして頂きます。残った部分について総合的選考で選ぶということになります。こういう形の制度でございます。

最後の第３点目でございます。新制度の検討ということですが、結局は２点に絞られてくると思います。まず第１点目は、総合的選考についての検討、第２点目、複数志願制についての検討、この２点が検討の重要な部分になろうかと思っております。

まずこの検討に当たりまして、私どもは教育関係者からそれぞれご意見を頂きました。さらに、平成10年度、実際に高校に入学された34校、1,399人の受験生と保護者を対象に、アンケートを取らせて頂きました。本日はそのアンケートをもとに、総合的選考、複数志願制について若干触れさせて頂きたいと思います。それらの結果を見まして、私どもは、総合的選考の理解が得られてきているのではないかという立場に立っています。アンケートの項目に、「成績と個性や調書を含めた選考の組み合わせがよい」という部分がございまして、これにつきましては受験生の50%、保護者の68.5%が賛成をされています。ちなみに昨年も同様のアンケートをしておりまして、その場合、受験生は38.3%、保護者につきましては50.5%ということで、かなりの率で賛意を得ていると言えるかと思っております。

なお、この部分につきましては、選考方法の明確化というものが一層求められていると思っております。アンケートの中に「個性、長所の評価基準があいまいである」といった受験生、保護者の意見もございます。

次に、複数志願制でございますけれども、これ

につきましても、先程と同様に複数志願制の理解が得られてきている、という考え方でございます。アンケートによりますと、受験生で63.7%、保護者の方で64.8%の賛意を頂き、1校志願よりも複数志願制の方がよいということかと思います。ちなみに昨年は受験生の39.6%、保護者の48.2%でございましたので、この部分についてはかなりの賛意が得られていることでございます。

続きまして、複数志願制については、同一校志願率が上昇しています。ちなみに昨年が77.7%、ことしが83.1%でございましたから、5ポイントほど伸びているということでございます。この辺のところで関係者の意見として、複数志願制が機能しなくなったのではないか、との指摘もございます。こうしたアンケート、それから関係者の意見ということで、現在まとめてさせて頂いているわけですが、私どもでは、この制度が比較的理解されてきているのではないかと思っております。

以上でございます。

黒　沢：どうもありがとうございました。アンケートに基づいて3点の問題設定のもとに、結論としては、「県民の理解が得られている」というのが行政の立場であるということだったと思います。ご質問があろうかと思いますが、それは後に回わしまして、お二人目の奥山さんにお願いしたいと思います。

奥山（県教育庁管理部総務室室長代理）：奥山でございます。

私の方からは、きょうのタイトル、「入試が変わった！　高校はどう変わる？」の「？」の方の説明をさせてもらえればと思います。

お手元に、「これからの県立高校のあり方について」という、検討協議会の答申の概要を配らせて頂いております。これは9月21日に協議会の会長、平出彦仁先生から頂いたものを、コンパクトにまとめたものです。これだけを説明しましても30分ぐらいになりますので、今日はその中の本当に核心の部分に触れさせて頂きまして、後ほどの議論のきっかけにして頂ければと思っています。

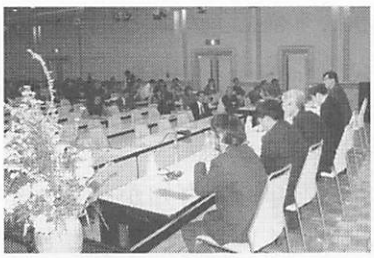
今、鈴木主幹の方からお話のありました入試の問題、これは非常に重要でございますが、入試の問題を考える場合に、視点をもう少し後ろの方にずらして、高校全体がどう変わっていくんだろうか、こんなふうな立場に立って頂きますと、手元にある「県立高校将来構想」がまさにうってつけじゃないかと思っております。特にこれから県立高校が変わっていくときの、基礎にある理念がこの中に盛り込まれております。

皆様方もこういう新聞記事をご存知かと思います。手元でちょっと見えにくいんですけれども、「県立高校統廃合、来夏までに具体案」「20～30校削減焦点」。「神奈川新聞」の9月22日付の記事です。こういうことを書いて出しちゃうわけです。これはうちの見解ではございません。「神奈川新聞」の見解なんです。ここにあるのは、あくまでも器の話なんです。協議会の平出会長からは昨年の4月に初めての協議会が開催された時、「統廃合ありきでこの協議会はやらない。私はこれからの県立高校の教育内容を中心にして議論していく」というお話を頂きました。ですから、今日こうやって皆様方の前に出て、私もお話をさせて頂くわけですが、資料に基づいてちょっとご説明しますと、1ページ目のⅡ「今後の高校教育に求められるもの」(県立高校将来構想検討協議会答申の概要資料2)、ここがこれからの神奈川の県立高校の教育内容の根幹になってくる、こういうふうにご理解を頂ければよろしいと思います。それが入試の方にも影響しますし、単位制高校とか、総合学科のあり方にも大きな影響を与えてきます。そういう目でこの部分を見て欲しいと思います。

今後の高校教育の教育内容は一体どんなものなのか。大きく三つに分かれております。

最初は個が生きる教育です。これはいわゆる個性尊重の教育でございます。生徒が自分の個性を見出して、生き方を選択していくための自分探しを支援していきます。ここに盛り込まれている個性を尊重するということはどういうことなのか。これは私なりに解釈致しますと、これまでのようにできない生徒を何とか引っ張り上げる、努力す

れば報われるという日本の非常にすばらしい哲学があるんですが、それだけではこれからはなかなかうまくいかないんじゃないのか。それぞれ子どもたちが持っている個性に着目して、その個性をより以上に伸ばしていく。そういう教育をしていきたいということがここに出ていると見て頂ければと思います。



そうしますと、さっきの形から先に入ってくる改革じゃなく、一体何を学びたいのか。その哲学がこの個性を尊重するという方向性になって出てくると思います。例えば皆様方、家を買うときに建て売り住宅か、注文住宅かを考えます。まずお金の問題があると思うんですが、まず建て売りと考えると思うんです。そうしますと、3LDKに入ってから、この部屋をどうしようかと悩むのです。ライフスタイルを考えずに、入ってしまった後に悩むわけです。そうではなく、自分はこういうライフスタイルがあるんだ。だから、こういう住宅に入るんだ。先に自分の考え、哲学ありきなんです。そうすれば「総合学科に私は行きます」「普通科がいいです」「僕は単位制の普通科高校に行きます」、そういうふうな選択肢が主体的に出てくるわけです。先生にはそれを支援して頂く。これが中心になってくるんじゃないかと思っています。

そういった子どもたちのさまざまな個性に着目した場合、これからは学歴でなく、生涯にわたってどのような知識や技術を身につけて、豊かな人間性を養ってきたかが大切となるのではないだろうか。これからはいかに学んだかという学習歴を重んじる価値観に転換していく。これが個性が生きる教育の柱になってきます。

先ほど鈴木主幹もお話したとおり、多面的な能力を人間は持っているわけです。学力という一つの物差しで測って、子どもたちを序列化するのはもうそろそろ時代的に難しい。例えばこれは一つの例なんですけれども、王貞治と長嶋茂雄という野球人がいます。長嶋の方が成績は余りよくないんですよ。でも、人気という点ではどうでしょう。数値化すれば、王の方がホームランは多分たくさん打っています。人格的にもすばらしい人と聞いているんですけれども、長嶋にも人気がある。数値化できない何かというのが個性じゃないかと思います。そういうことに着目した教育をぜひ皆様方、現場の先生方に取り組んで頂ければと、そういう意味を込めまして、個が生きる教育、これを一つの柱とさせて頂いております。

次に豊かな心をはぐくむ教育についてです。協議会の流れを、報告させて頂きますと、私は逐一事務局で見ていまして、最初は個が生きる教育で柱が終わってしまうんじゃないかと思っておりました。これは中教審にも出ていますし、誰も否定できないところでしたが、議論が進む中で実は神戸のあの恐ろしい事件が起こりました。あるいは黒磯でのキレた子どもの殺傷事件がありました。そういう社会的な状況を見る中で、能力を開発して、実力をつける、そればかりじゃない。ここにもあります。豊かな心をはぐくむ教育、他の人への思いやりを育てて、豊かな心の育成を目指すことが大切になってくるという意見が出されました。神奈川では「ふれあい教育」を進めてきました。こういったゆとりのある教育活動を展開していく中で、人間性をはぐくむ教育も大事だろうという考えかと思います。

これも私なりに考えてみますと、生徒にしてみると、入試もそうなんですが、試練があるわけです。人間というのは死ぬまで試練が続くわけです。私も今日こういう場面で試練を受けているんですけれども(笑)、その試練をさせてないで、例えばですけれども、ある小学校だったと思うんです。徒競走で同じ成績の人たちをそろえて同時にゴールをさせる。また、最近は川岸が全部コンクリートで固められて安全になっている。なぜならば、けがをしたら管理責任で国なり、県なりが痛い目を見るからということもありますが、親御さんが自分の子どもが少しでもけがをしちゃいけないと考えている。子どもの試練に対して、どうも後ろ向き、消極的になっているんじゃないか。それは、今の社会が一発勝負で終わり。失敗を認めていない社会だからじゃないのか。何度もトライができる、そういう風潮をどんどんつくっていけば、中

学校の先生方だって進路指導がもっと楽になるんじゃないか。そのためには保護者の方々が、今までのようにどうしてもあそこにということではなく、2番せんじ、3番せんじでもいいんじゃないのとゆとりを持って考えることが大切ではないでしょうか。

私は好きなんですけれども、山田太一さんの「ふぞろいの林檎たち」という作品を持っています。あの人は松竹に入っているんですが、たしか教員志望だったんです。何を間違えたのか試験日を忘れちゃって受けられなかった。やむなく松竹に入って、あれだけの名作をつくる。そういう失敗、それを認めて、もう少し寛大になっていく。それが豊かな心をはぐくむ教育につながるんじゃないか。協議会の中でも福祉を担当している先生がいらっしゃいまして、こういうものも一つの柱にして欲しいというご意見を頂いています。

そして三つ目、望ましい社会性の育成です。学校というのは、勉強だけじゃない。ホームルーム活動、部活などを通じて、いろんな個性と触れ合っていく中で、譲るところもあれば、主張するところもある。そういった切磋琢磨の中で社会性を育成していこう。これもやはりこれからの高校教育の一つの大きな柱になるんじゃないかという意見、これも貴重でした。そして3番目の柱とさせていただいたわけです。

望ましい社会性と言うと、年上の人は尊敬しなきゃいけないといったモラルを大切にするという考えがあります。私みたいに尊敬できない人にも、「尊敬しなさい」と言ってくれる。そういうのもうれしいんですが、よくよく考えますと、今、国際化が進んでいます。グローバルスタンダードと言われています。今、我々の周辺で、例えば談合の問題、系列の問題とか、そういったものは我々の社会では十分通用するけれども、グローバルに見た場合にはそれはどうなのか。そういった疑問を自分の中で醸成していきながら、ではどうするのか。それも社会性の育成の一つのポイントになってくる。これから国際化していく中で、やはり望ましい社会性の育成も大事じゃないか。こういったポイントを頂いております。

私の持ち時間も限られておりますので、こういった部分を含めて、具体的にどうするのか。それにつきましては、また皆様方のご質問を頂きながら、お話をしたいと思います。以上です。

黒　沢：どうもありがとうございました。ご用意頂きました資料に従いまして、3点にわたって、多様な入試の背景について、行政の担当者としてどう考えているかということを明確にお話しくださいました。

それでは次に順序に従いまして、平塚の中学校の河村先生にお願い致します。

河村（平塚市立大住中学校教諭）：中学校の現場から、新しい入試制度を経験して、そこで出てきた問題等を中心にお話をしたいと思います。

その前に、広い意味での進路指導に触れさせて頂きたいと思いますが、ここ10年ぐらいの間に、中学校の進路指導というものがかなり変わってきているのではないかと私は感じています。以前は「何になりたいか」という希望の職業につくまでを目標に置き、今は何をやるべきか、自分の個性は何なのかということを考えさせるような、単線的な指導が主だったように思うんですけれども、ここ10年ぐらいの間、少しずつ多様な価値観が生まれてきて、いろんな生き方が出てきた。そういう中で「もう少しいろんな生き方があるんだよ」ということを伝える指導が増えてきた。例えば働くことの意義なんかも職場体験学習を通して働くことの意味を考えたり、あるいは社会人の方から話を聞く中で、「こういう生き方があるんだ」「一つの職業でもいろんな進路があるんだな」といった感想が生まれてくる、そういう多様性やいろんな可能性があることを知らせる。自分が何を本当に好きなのか、何をやりたいのかを考えさせ、夢とか希望を持っていこうということを伝えていくような指導に少しずつシフトをしてきたような気がしています。

今、実際に私の学校でも、三年間を見通した計画の中で、ただ単に職業につければいいということではなくて、生涯学習的な部分を視野に入れながら考えていこう、生き方を考えていこ

うという指導になってきています。ところが、3年の半ばになりますと、ここでいわゆる進路指導というのが始まりまして、それまでいろいろ希望を持とう、夢を持っていこう、いろんな生き方があるよと言ってきたのが、ここへくると、現実を見ろというような形で、可能性に気付かせる指導から、可能性をふさいでいく指導になってしまっていることを感じています。

そこに非常に大きなギャップを感じていまして、例えばA高校を希望したいんだと言ってきたときに、結局その可能性の部分で、「努力をしても非常に可能性は少ないよ」というような言い方をそこでしなければいけない場面というのが出てきます。そのことが結局輪切り的な指導というふうに言われるのかなと思うんですけれども、それを本当に我々が望んでやっているのかというと、そうではなくて、できれば希望する進路にみんな進ませてあげたいし、そのまま夢を持っていってほしい。中学校でちょっと実力が出なかった子も、上でもっと伸びるんじゃないか、伸びてほしい。そういう道を保証してあげたいという気持ちはあるんですけれども、実際に学校間格差が厳然としてある中で、やはり輪切り的な指導をして行かざるを得ないという現状かあります。

ですから、新制度で学校間格差をなくそう、そういう指導をなくしていこうというような、その理念に対しては非常に賛成をするというか、結構だと思うんですけれども、では、その理念が実際に今2回の試験を経験した中でどうかと言いますと、一つは、複数志願制の部分について言いますと、定員の枠内を80%と20%に切るということで、1次志望の枠を逆に狭めて、不本意入学を結果的につくっているというようなことですとか、あるいは第1希望の学校、第2希望の学校ということで、逆に格差を生むようなことにつながっていたりとか、結局ふたをあけてみないとどうなるかわからないというところで、特に初年度などは、第1志望で不合格だった高校に欠員が出るような状況もあったと聞いております。そういう矛盾点を抱えているのではないかと思います。

総合的選考につきましても、確かにそれぞれの学校で重視する内容を出してきているわけですけれども、内容が非常に見えにくいというか、具体的に何を使って、どういうふうに決定をされているのかというのが、見えない中で決まってくるというあいまいさの部分。それから生徒会活動ですとか、部活動ですとか、ボラエンティアとか、そういった、いわば数値にできないような部分も数値化して、学校によってやり方は違うかと思いますけれども、選考の資料にする、そういうことが中学校の日常生活の中に及ぼしてくる弊害という部分も、聞いております。

調査書について言いますと、学級担任が自分の書いたものが評価されるというようなプレッシャーからたくさん書いてしまう。そういう事務的な部分での声もよく聞きます。

いろいろな問題があると思うんですけれども、具体的にどうしていったらいいのかという部分は非常に難しいと思うんです。課題を指摘するのは簡単ですけれども、じゃ、どうしようかということは難しいと思うんです。例えば総合的な選考で重視する内容の中に、地域性みたいなものを入れていくことで、地元の中学校を優遇するという部分を入れていくようなことはできないのかなとも考えています。

ただ、それを実際にやるとなると、高校そのものがもう少し変わっていかないと難しいんだろうなと思います。多様な子が少しずつ入ってくるようになると、やっぱり多様なニーズに応えるような選択の幅の拡大ですとか、総合性あるいは単位制、そういったような形で変わっていかないと、なかなか難しいのかなと思うんです。地域の子が自分の地域の学校へ進んで、自分で希望することが勉強できる。もしそんな形が実現できると、今現場で感じている1、2年までの進路指導と、3年での進学指導のギャップの部分も随分埋まってくるんじゃないかなと考えています。

ただ、学力偏重の価値観というのは、なかなか根強いものがありますので、実際に非常に難しい問題ではあると思いますけれども、ここでの話は以

上にしまして、また何かありましたらお願いします。

黒　沢：どうもありがとうございました。10分間という制約で、なかなか話にくいところがあったと思いますけれども、進路の現場にいられて、若干の変化が起こってきているということと、改革の理念には賛成できるが、現実には今回の入試の色々な問題が出てきているというお話です。さらに中学校の立場から、高校のあり方についての提言も頂きました。

それでは只今の生徒を送り出す側から、今度は受け入れる側の高校の立場からご意見を頂きたいと思います。県立平塚工業高校の石田先生、よろしくお願いします。

石田（県立平塚工業高校教諭）：それでは時間が限られていますので、できるだけ単刀直入に、高校現場からの提起をさせて頂きたいと思います。

まず、2年間の新入試制度を経験して、高校現場でどういうことが起こってきたのか、そして現場ではどういうことを考えているのかというところからお話をします。今、中学側から話がありましたように、初年度県立高校では、59校641名という欠員を出したわけです。59校というと3分の1強です。それから641名というのは史上2番目だという話ですが、それほど大量の欠員を出しました。これは欠員を出しただけではなくて、例えば80%枠で不合格者をたくさん出していながら、結果的には第2希望枠が少なくて欠員になってしまう。それで再募集をしなければならない。これは高校の側にとってみれば大変なことなんですね。せっかく希望者がたくさん来てくれたのに落としてしまって、ふたを開いてみたら第2希望で人が来ないから欠員だ。そういう話ですね。これは逆に子どもの立場からしても大変ですね。結局落とされたんだけど、後で気がついてみたら、その学校は欠員だった。そういうことが起こっているわけです。

この欠員が生じてきた背景というのは、我々の考え方からすれば、数字を追っていくと極めてはっきりするわけでして、第1希望枠、第2希望枠という制度そのものにかかわっていると思われます。いわゆる第2希望が全然分からない。ふたを開いてみなければ分からない。ある学校では第2希望枠だけで考えると5倍、6倍という倍率があって、欠員が出ているところもあるわけです。何倍あろうとも、その子どもたちが第1希望校で受かっていれば回ってこないわけですから、それは最後まで分からないということなんですね。そういう中で欠員が起こったと思います。

当時の新聞の表現ですと、教育庁の指導部長は、子どもたちが行きたい学校を選んだ結果こういうことになったんだというふうに書いてあるんです。もしもそうだとするならば、子どもたちが行きたい学校にそれぞれ自由に希望を出せば、当然欠員は出てくるんだということになるわけです。641名というのは、そういう結果偏りが生じて欠員が出たんだと考えざるを得ないのです。そうしますと、「行ける学校から行きたい学校へ」というスローガンに基づいて「子どもたちが選んだ結果、そうなったんですよ」ということであるならば、そのような制度変革というのはどうだったんだろうか。賛成できるのかどうなのか。端的に言ってしまえばそういうことなんです。

冒頭に黒沢さんの方から話があったように、第14期の中教審の方法論的な格差解消の手だてをそのまま神奈川県はやっているわけです。それは各学校に特色をつくって、子どもたちが自分の興味関心に基づいて、その特色を選んで学校に行きなさいと、それが「行きたい学校」ということです。そういう説明なのです。もしそういうことがこれから進められていくとなると、高校の方が、それに対応する人数を考慮しながら、子どもたちの興味関心にぴったり合う特色を出さない限り、これは不本意入学になるか、欠員になるかという話になるわけです。最初に話した第1回の641名というまれに見るたくさんの欠員を出したことですでに証明できたのではないでしょうか。一言で言ってしまえば、そんなにうまくいかないということですよ。

私の学校は工業高校ですから、工業高校としての特色はあります。私のところに新入生が入ってくると必ず聞いてみます。私は化学科なんで、「君は化学が好きだったか」と聞くわけです。あるいは授業のときに化学が好きだったかどうだったか

手を挙げてもらう。3分の1好きだという子がいたらもう万歳ですね。どちらかと言うと、嫌いだったという方が圧倒的なんです。化学科ですよ。こんなにはっきりとした特色はないじゃないですか。それが現実だということです。

中には推薦で来た子どももそうなんです。1年もたないで、自分が思っていたことと全然内容が違っていた。だから、辞めるというので、4月に入ってきて12月ぐらいで辞めていく子が推薦入学者でいるわけです。面接をすると、「僕は化学が大好きです」と言うんです。「この学校を出て化学関係の会社に行きたい」と立派なことを言うんです。だけど、やっぱり手を挙げるときには、化学はどちらかと言うと嫌いだった。私のクラスですけれど、その子は挙げていました。「何が好き」と言ったら、「英語が大好きなんですけれども」と、英語の先生に聞いたら、本当に英語の点はいいし、非常に前向きであったと、そういうふうに言っていました。でも化学は嫌いだったんですね。

化学科ですから、どうしても化学に関係する授業が多くなります。これは仕方がないですね。中学3年生を卒業して、自分が行きたい方向が定まって、普通科高校に行くんだ、工業高校に行くんだ、総合学科に行くんだと、さっきお話がありましたけれども、そういうふうにうまくいっているのかどうかというのは、中学校の先生、あるいは中学生を持っている親、あるいは子ども自身、この辺をよく調べてみると分かるんじゃないかと私は思います。

そういう子がいないと言っているわけではありません。そういうふうにうまくいくはずだという前提で物事を考えていったら、現場では全く違うことが起こっているということを説明しているわけです。これは事実なんです。恐らくほかの学校でも似たような状況が起こっているでしょう。

現在の高校教育改革、文部省が主導で進めている柱には幾つかあります。神奈川も、それにのっとってやっているわけですが、一つは、入試の多様化です。それから特色づくり。もう一つが、学校制度そのものをいろいろといじる。例えば第3の学科だと言われた総合学科とか、あるいは単位制高校、こういったものを文部省が打ち出しました。あるいは中高一貫校、この辺をよく見てみますと、総合学科というのは、一つの学校に特別な特色をつくるというのではないんです。中に入ってから子どもたちのニーズに合わせて、いろんなものが選べるようにしなさいよというのが総合学科の理念です。単位制高校もそうですね。いろんな単位が取れますよ。片側でもってA校はA校なりの特色を出せということを指導するわけです。随分おかしな話なんですね。

現在、「神奈川新聞」がこう書いたじゃなくて、近い将来統廃合も出てくるんじゃないか。工業高校というのは、先ほど話したように、子どもたちにあまり人気がないから、統廃合の対象になるんではないか、ということでもって戦々恐々とした先生方が、自分の学校をもう少し魅力のあるものにしようと、いろいろ検討が進んでいます。

どの学校も、総合技術高校という名前をつけるかどうかは別として、基本的にはそういう方向で検討が進んでいます。子どもたちが、入学してから選べるようないろんなメニューを用意して、そこで子どもたちの興味関心に合ったものが選べるような学校づくりの方向で、神奈川県の工業高校の検討は、進められています。私はそれは正しい方向だと思っています。

先ほど言ったように、化学科だから化学の授業が多いに決まっているところに、その化学が嫌いな子が来るわけですから辛い。そうではなくて、化学の嫌いな子どもでも、自分の好きなことができれば一番いいわけです。あの子だって辞めていかなくて済んだんです。英語の得意だったわけですから。子どもたちは入学してきて、どんどん変わります。その変わることに期待をしますし、また、それに対応できる学校づくりということを本格的に考えていく必要があるのではないか、そんなふうに思います。

とすると、果して現在神奈川県で進められている高校教育改革の流れは、本当に正しい方向にあるのかどうか。私は高校現場からだけですが、そこから見

ている限り、軌道修正が迫られるんではないかとそんなふうに思います。

今朝の新聞を見ますと、文部省は特別な事情があれば入試はしなくてもいい。筆記試験はやらなくてもいいというような記事が出ていました。文部省は、戦後間もなく入試はやらなきゃいけないとしていたのを、やっとここにきて軌道修正をし始めたと思いますが、神奈川県の教育行政の方もぜひ軌道修正をお願いしたいとお伝えして、発言を終わりにしたいと思います。

ちょうど10分です。(拍手)

黒　沢：どうもありがとうございました。拍手を頂きましたけれども、高校の立場から大量の欠員が出ている事実をご指摘されて、総合的選考の問題点、複数志願制の問題点を出されました。それと関連しまして、総合学科や単位制の問題も、今後神奈川県の高校改革の進行の中で、かなり具体化されてくるだろうと思います。それについての先生のご意見も明らかにされたと思います。

以上で一応予定されました最初の四人のシンポジストの方のご報告が終わりました。従来のシンポジウムですと、ここで一息入れまして、休憩をはさんで、質問事項をあらかじめ出して頂き、それを司会の方でアレンジするというのが通例です。しかし今回は事前の取り決めによりまして、このまま続けさせて頂きますので、お疲れの方は随時個人的にお休みください。

それでは大変恐縮ですけれども、このまま続けさせて頂きます。

予めタイムスケジュールの説明で皆さんに申しましたように、私の方から簡単な質問を4人の方々に致しますので、先ほど10分ではとてもしゃべり切れなかったことも含めて１人５分間ぐらいで再論をお願いします。よろしいでしょうか。よろしくなくてもそういうふうに進めますので（笑)、御了解下さい。

最初の鈴木さんに対してましては、アンケートをもとにご報告なさって、結論的には県民にご理解を頂いているという結論だったと思います。私は、そのアンケートは存じ上げませんが、尊重したいと思います。私が最初に申しましたように、まだ２年目でございますから、そんなに詳しくは分からないと思いますけれども、端的に、多様化によって格差是正というものはなくなる方向にあると考えてよろしいのでしょうか。単純な質問かもしれませんけれども、その点をまず質問したいと思います。

それからもう一つは、中学の問題ですね。河村先生の方からも出ましたが、地域に根差したということをおっしゃいました。私もその点は非常に大事な点だと思います。15期中教審も、地域の教育の再生について相当のスペースをつかって提言しているわけです。それと今回の入試選抜の改革というものが、かなり整合性があるのでしょうか。具体的に言えば、地域の再生という視点からいってかなり成果があった、あるいはこれからもあるだろうというお考えに立っていらっしゃるのか。そういうことを質問させて頂きたいと思います。これが鈴木さんに対する質問です。

それから奥山さんに対しましては、おっしゃる３点は私も十分わかるつもりです。その点については反対は全くないのです。しかし、河村先生がおっしゃったこととも重なりますが、確かにおっしゃるように、「哲学」を持って入らなきゃいけない。もうちょっと易しく言いますと、選択が予めあって学校を選んで欲しいとおっしゃいましたけれども、私の関わった限りでは、今の中学の現状ではそこまで望むのは無理ではないだろうかと思うのです。もちろんそういう動きは出てきているとは思いますが、入試という壁がありますので、差し当たってはとにかく高校に入らなきゃいけない、それには「つぶしがきく」という言い方は悪いですけれども、入ってからもある程度選択幅がある普通高校へ、それからせいぜい総合学科だったら多少は何とかなりそうだとか、そういう気分で入ってくる子どもが全国を回ってみますと、非常に多いように思うのです。

ですから、おっしゃることは非常によくわかるし、今後そういう方向への努力は続けてもらいたいと思いますけれども、少くてもここ数年はなかなかそうはいかないのではないかなと思います。その点についてより具体的なお考えがあ

ったらお話して頂きたいと思います。

それから河村先生に対しましては、現場で大変ご苦労なさっていることはよく理解できました。また進路指導の場において、10年ぐらいかかわってきた御経験を踏まえたご意見も大変興味深く拝聴しました。そこで一つだけお尋ねします。先程言われたことは保護者の考えを含めたお話しなのか、あるいは生徒自身の考えなのか、あるいは両方のことを踏まえておっしゃっているのかということをお伺いします。もっと幾つか聞きたいんですが、時間の制約もありますので先生にはこれだけに限定します。

それから最後の高校の石田先生のご意見は、私の不安ともかなり重なるところがあります。石田先生は工業高校の先生ですので、工業高校自体が特色があるわけですから、そんなにご苦労はないかもしれませんが、「特色づくり」ということについて、どんなふうにお考えになって現場で努力をなさっていられるのかということを、もうちょっとお話して頂きたいと思います。それから「推薦」はかなり問題が出ています。これからも多様化の選抜の手段として拡大されていくと思いますので、もし時間がありましたら、今でもこういう問題点があるということも含めてお話頂ければありがたいと思います。

その他将来の構想についてのご意見は、また後半の方で議論をして頂きたいと思います。

以上、お分かり頂けたでしょうか。答えにくい点もあるかと思います。その上時間が１人５～６分ぐらいしかないのですが、よろしくお願い致します。

鈴木（彰）：２点ご質問ということですけれども、まず第１点の多様化により格差が是正したかという件でございますけれども、これについては、先程申しましたアンケートの結果には、そういった項目で調べてございませんので、当然出てきておりません。ただ、検討の過程で、教育関係者の方からいろいろお話を伺っております。

その中で、例えばこういうのがございました。「特色ある生徒の入学により、学校が活性化してきた」と。今まで委員会活動とか、部活動のリーダー的な方が入ってきていなかった学校さんにつきまして、最近入学してきたということで、部活動なり、委員会活動が活発化してきたというご指摘でございます。それは具体的に是正が進んでいるかという直接の答えになっていないかと思いますけれども、そういった話を耳にしました。

それから地域に根差した特色づくりということで、入試改革との整合性でございますけれども、これも先程申しました入試の総合的選考という部分でございます。これにつきましては、各学校が入試する内容につきまして、募集案内を各中学の３年生全員に夏にお配りするわけでございます。その中で、それぞれの学校が教科活動と、教科外活動につきまして、挙げてございます。教科活動につきまして、十分に地域に根差した特色が出るかどうかというのは、なかなか難しいことでございますけれども、教科外活動につきまして、地域のニーズに即したものを学校で取り入れているという状況があれば、当然その部分で入試との整合性が出てくるものではないかということで考えております。

黒　沢：何か補足することは。よろしいですか。

鈴木（彰）：結構です。

黒　沢：どうもありがとうございました。では、奥山さん。

奥　山：ただ今の黒沢先生のお話ですけれど、中学の現在の状況の中では、差し当たって明確な志望を持っていない子どもたちは、普通科高校はどうだろうかと、そんなお話を頂きまして、これにつきまして協議会の中でも、やはり同様なお話が出ています。

協議会のある委員さんの意見でも、お子様たちの意見を聞いて、中学校で進路指導をしていく中で、明確に「私はこういうことをやりたい」という子どもたちは実際にどのぐらいいるのかというと、10人に１人じゃないのかと、そういう意見を頂きました。その10人のうちの１人は、その希望に従って、例えば自分にマッチした専門学科があれば、そこに入っていくという方向を選べると思います。

まだ明確じゃないという子どもたちに対しては、例えば総合学科、先程高校の先生からもお話を頂きましたけれども、入って１年目に「産業社会と

人間」という科目をとり、自分がどういう生き方をしていったらいいのか、将来の職業に照らし合わせながら授業を受けていく中で、自分がやりたいことを見つけていく。こういう新しい取り組み、これは大師高校で実際に行っているわけです。1年間そういう勉強をした後、2年、3年で自分の進路をだんだん定めていく、こういうやり方もありますし、普通科で進学一本やり、これも結構かと思うんです。要は、今まで普通科に偏っていた高校、選択する幅が余りなかった高校を多様化させていくことです。

子どもたちにしてみれば、自分たちの個性を尊重する時のバックボーンには、一つは、自分がどういう人間なのかを見極めたいということがあります。ですから、例えばよく話題になっている指導要録の開示請求、これもよく分かります。自分は何なのかを見極める。学校でどう見られているかを知りたい。これが一つあります。もう一つは、選択権を自分で確保したいということがあります。

ですから、多様で柔軟な高校教育、このページで申し上げますと、2ページ目、「これからの県立高校のあり方」の方に出ていますが、多様な教育を展開していく。総合学科学校でまず1年間自分探しをして、2年、3年に進んでいく。普通科もいいし、普通科の中で専門コースもその多様な選択肢の一つになります。いきなり専門学科でもいい。こういうふうな多様性を確保していくやり方の中に、今の黒沢先生の質問の答えがあるような気がします。

黒　沢：どうもありがとうございました。それでは順序に従いまして、河村先生、お願いします。

河　村：保護者の考え、生徒の考えを含めてのことかということですけれども、我々は、前の入試制度も経験しておりますし、毎年やって比較ができますけれども、保護者、生徒にとっては、そこが初めてという場合が非常に多いので、そんなものかなという感じで新制度については受け止めていると思うんです。前に上の子で経験をされたお母さんは、戸惑いと言いますか、前と違うという部分で、先生は余りはっきり言ってくれないという感じはあるんじゃないかと思います。

また、そういう中で私学併願という部分が増えてきている。開けてみないと分からないという部分が非常に多いので、そこは非常に多くなっているという実態はあると思います。

それから先程申し上げた、地元の生徒を優遇するというような部分について言えば、これはいろんな方がいらっしゃいますから、いろんな考え方があると思うんです。保護者、あるいは地域の方にとっては、一概に賛成してもらえない部分も随分含んでいるのではないかと思います。学力偏重の価値観が根付いている中で、学力的に上位の学校と、課題集中校と言いますか、そういう学校の地域とでは非常に温度差が出てくるでしょうし、そういう中で基本的に教師も含めてですけれども、価値観みたいなものの転換を図っていかないと、なかなか難しいと思います。

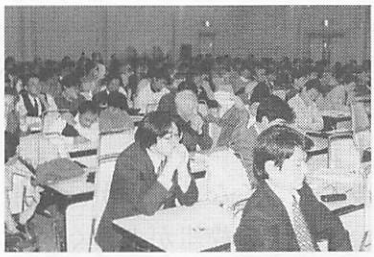
そうした上で話は少し大きくなりますが、教育改革が今進められていて教育の枠組が大きく変わろうとしています。これは、制度も価値観も何か転換を図っていく一つのきっかけになるんじゃないかと思っています。私もあの子はできる子とか、できない子とか、そういう言い方を職員室でしている状況があって、そのできる、できないというのは何かと言うと、英語、数学、国語ができるか、できないかという部分で言ってしまっている。「あの子はできるけど、リーダー性はないよね」とかいう言い方、教科ができることが何でも優秀なことにつながっていくような、そういう価値観みたいなところをやはり見直していかないといけないと思い始めています。なかなか実際には難しいのかなという気はしていますが…。答えになっていなくて済みません。

黒　沢：ありがとうございました。最後になりましたが、石田先生。

石　田：二つ質問されましたが、最初の特色づくりですが、私のところのような専門高校、あるいはそれぞれが個性等を持っているところは、恐らくそれでもう問題はないんだろうと思うんですが、要は多くの普通高校がどのような議論をされているかとい

うことだろうと思います。残念ながら詳しいことは分かりません。ただ、いろんなところから聞く話では、いわゆる社会的な評価として各学区のトップの方にあるところは、極端な言い方をしてしまえば、先ほど奥山さんも言われましたが、受験も特色だと、これもいいわけです。

問題なのは、こういう言い方はしたくないですが、中から下に位置する高校が何とか上位にのし上がろう、何か最近はやりの子どもを引き付けるような格好いい言葉を一生懸命考えるということに現実はなるんじゃないでしょうか。



ただ、それで成功するかどうかは別でして、恐らくそう簡単にはならないでしょう。これはその次の推薦の質問にも重なってくるんですが、推薦は一般の普通科高校は入っていませんけれども、私の学校でも県教委の方が50%にする用意があるから、考えろみたいなことが7月に急に出されまして、ほとんど議論をする時間もないままに見直しました。賛成意見は「どうせ工業高校は希望者が少ないから、早く推薦で確保しておかないと、欠員になったら大変だ」なんですよ。おわかりですか、これは推薦でしょうか。推薦というのは違うんでしょう。

今話があったように、少々成績は悪いかもしれないけれども、工業が好きだから、その点から入学してくる。大歓迎ですね。しかし、そうではないということです。推薦がどういうところに利用されているのか。推薦を大いに利用しようとするのは、どちらかと言うと、今言ったように評判が余りよくないから、早目に確保したい。こういうことで推薦を利用されることが明らかじゃないでしょうか。恐らく各学区の上位校では推薦なんてどうでもいいんじゃないか。それなりの生徒が集まってきてくれるわけですから、そういうところに私は推薦の問題性があるんじゃないかという感じが致します。

もちろん推薦という、いわゆる学力検査をしないで採りますから、さまざまな要素を取り入れながら、その学校の特徴をつかんでいくことは、その学校の先生方、あるいは中学校との連携だとか、いろんなことを工夫しながら、それなりに意味のあるものをつくり出すことができるかもしれません。できるだけ近隣の中学と連携して、地域の子どもたちを優先して採っていくとか、地域の教育を育てるということの観点から、実施する方法は残されていると思いますが、必ずしもそうではないだろうと思います。

やはり子どもたちにしても、親にしても、できるだけ評判のいい、社会的な評価がいい学校に子どもを入れたいだろうと思いますから、そういう入試の力学が働いている限りにおいては、選抜がある限りずっと続いていくでしょう。そういう中で推薦だったら、学力検査をしなくて済むんですから、「もしかしたらおまえ入れるよ」ということでもって、推薦の場合はまたさらにもう一回チャンスがありますから、だめでもともとみたいな形で実施している。そういう利用の仕方もあるでしょうし、それはあくまで入試というからくりの中でもって、親も子どもも中学校の先生方も、あれこれ苦心してそれに対応するのが現実だと思います。その辺の考え方を全部解消したところで、純粋に推薦というものを活用して、例えば学校間格差をなくしていこうとかいうように働いていくならば、それはそれなりに意味があるだろうと私は思いますので、全面的に反対だと言っているわけではないんです。現実はどういうふうに動いているのかということを考えれば、なかなか難しいだろうということを言っているわけです。もしも普通科高校全部に推薦制なんていうことになれば、大変なことになるんじゃないでしょうか。

それから先程言い忘れたことで、一つだけ指摘をしておきますが、新入試制度が始まった初年度、昨年ですが、昨年1年間の高校中退者が史上最高になりました。先程言ったように、県教委の指導部長が、行きたい学校を選んで行った結果、欠員が生じたとおっしゃっていたわけですけれども、行きたい学校に行ったら、中途退学者が一番多かったという話になることについても、やはり気に留めておく必要があるんではなかろうかと思います。以上です。

黒　沢：ありがとうございました。私は、もう少

し時間を取られてご発言頂けるかなと思ったんですけれども、皆さん時間を気にされて、非常に忠実に私の質問に限定して答えて頂きました。御協力を感謝します。

従いまして、討論の時間が少し増えたことになります。ところで会場の皆さんも、司会者が余計な質問をするなあ、とさっきからじりじりしていられると思いますが、もう少し我慢して下さい。

今の石田先生は工業高校ですので、そこでのご自分の体験を踏まえての発言だったと思います。例えば推薦の問題にしましても、先程の特色づくりにしても、高校の種類によって異なると思いますし、また学校がある場所・地域によっても結構違うのではないでしょうか。それから言葉はよくないかもしれませんが、ランクの高い学校、つまり、進学校とか、逆に「底辺校」と言いますか、そういう学校では、相当事情が違うのだと思います。会場の中にそういう先生がいらっしゃいましたら、討論の中でぜひ補足して頂ければありがたいです。これは中学校の場合も同じで、学校を取り巻く環境によって状況は違うだろうと思います。そうした点を考えて頂いてご発言下されば幸いです。いかがでしょうか。

今お二方の手が挙がっています。済みませんが、発言の前に、所属とお名前をおっしゃって頂きたいと思います。

石橋（氷取沢高校）：総務室の奥山さんでも、高校教育課の鈴木さんでも結構なんですけれども、新入試は県民の理解を得られているという形で、さっきアンケートの結果でおっしゃったんですけれども、県の教育行政、つまり、公教育の教育行政を進められている方に対して、こういう観点で質問してみたいんです。

それはどういうことかと言うと、公教育というのは19世紀の終わりにできましたが、その公教育が始まったときに、一つは義務教育、それから世俗化、つまり、宗教と切り離すこと。もう一つは無償教育という観点があったと思うんです。教育の無償、つまり、お金がかからない。今度の入試改革は、いろんな意味でいいところも悪いところもあるんですけれども、結果的に塾・予備校に頼った。あるいはお金がかかるような方向にいったと思うんですよ。そういう意味では、いわゆる義務教育の中学に行っている保護者に経済的な負担を強いたという観点では、若干これは問題じゃないかと思うんですけれども、この点に関してお答えを頂ければと。先程県民の理解を得られたという観点で、アンケートでお答えを頂いたんですけれども、義務教育というのはお金がかからないような方向の教育じゃないかと思うんですが、いかがなもんですか。

黒　沢：ありがとうございました。もうお一方そちらで、手を挙げている方。今の関連でもよろしいです。どうぞ。

早川（向の岡工業高校）：社会科の教員をしております。

奥山さんにまず質問なんですけれども、現在の高校制度、多様化を進めようということで、個性の問題を挙げられていましたけれども、つまり、多様化をするということは、中学卒業時点でみずからの個性というものを的確につかんでいる、そういう前提に立たなければなりませんよね。それでないと県教委はそういう多様化を進められないと思うんですが、そのようにお考えになっている。つまり、現在の教育制度の中で、自らの個性を自らがきちんと中学卒業時点でつかんでいる、というふうに考えてよろしいのかどうか、端的に答えて頂きたいと思います。

第２点目、失敗を恐れないというふうにおっしゃいました。つまり、今度の入試制度というのは、失敗を恐れないと、つまり、失敗をさせるということでもありますよね。複数志願制というのは、入学できる枠は変わっていないわけですから、複数志願になるということは、倍落ちることにつながりますよね。入試制度を複数化すればするほど、例えば推薦制、１次希望、２次希望というように増やしていけばいくほど、落ちる回数のみが増えていく。結局入る数は変わらないですからこういうことになりますよね。

つまり、失敗を恐れないために、失敗をさせる制度をつくりたいと考えていると思うんです。簡単に考えればですよ。これはいやみで言っている

のではなくて、私は本当にそう考えているんです。失敗の経験をさせる、そういう入試制度なんだというふうにしか私は受け止められないです。そのように考えて、根本的な部分で、そうではないんだったら、そうではないと答えて頂きたい。

そしてもう一つは、失敗を恐れないような子どもたちをつくるのに、なぜ入試を使わなきゃならないのか。入試制度を使わなきゃならないのか。私は根本の部分だと思うんです。なぜなのか。そこを是非答えて頂きたい。

先程石田さんがおっしゃったことに少し補足します。私も工業高校に勤めていて、本校で今年の生徒にアンケートを取りました。近隣の工業高校、本校を含めて４校及び課題集中校と呼ばれている学校４校で、子どもたちにさまざまな形で取ったんですけれども、ここが一番入りたかった学校なのかどうなのかと、第１問はそういう質問をしたんです。そうしましたら、本校では一般入試で入ってきた子たちの内、17%しか本校を希望しなかったのです。問題は推薦の方なんですけれども、生徒からすれば、その学校に入りたかった生徒が来ているはずなんです。そうですね。制度的に考えればですよ。ここはちょっと質問なんですけれども、その推薦の目的というのを後で答えて頂きたいですが、現実に本校においては、26%、４人に１人、推薦で入った生徒ですよ、合格した生徒の中で４人に１人しか実際に本校に入りたかったというふうに答えていないんです。26.87%、そして同じく26%は他の工業高校に本当は行きたかった。そして25%の生徒が、他の普通科高校に行きたかったと答えている。

普通科の課題集中校を考えれば、15%が自分の学校に来たかった。55.89%の生徒は他の普通科高校に行きたかったと答えているんです。これは普通科の４校の合計263名のアンケートの集約結果です。工業高校は483名の集約結果で、自分の学校に入りたかった生徒は24.64%、他の工業高校に行きたかったのが16.36%、他の普通科に行きたかったのが33.7%という結果です。

この結果から、推薦も含めて現在の入試制度というものが、本当に行きたい学校に行けるということになっているのかどうか、もう一度お答えを頂きたい。胸を張ってそのように答えられるのかどうか。

黒　沢：ありがとうございました。恐縮ですが、質問を簡潔にして、修飾語はなるべく省略して端的にお願いします。

第１の質問は、私も申しましたことですが、ほかに。今、高校の先生方がかなり専門的な話をしましたが、どうぞ。

稲森（神奈川県教育を守る会）：まず鈴木さんにお伺い致します。今回の入試の是非は、アンケートでおおむね良好と言われましたが、そのアンケートを取った生徒は34校の何年生でございましょうか。１年生だったら私は信じられません。受かったんですから、おおむね良好とみんな答えると思います。

そのことと、それからアンケートについては、私は聞かれていません。入試が変わるときはもっと公募しましたよね。それと同じように、変わって実施された後に、もっと県民に広く、この入選はどうだったかということを問うたのか。私が知らなかっただけなのかもしれませんが、その点をお答えて頂きたいと思います。

それから奥山さんにお伺い致します。お話はとてもよく分かって、中学校を卒業したときは進路が明確ではない。だから、今回の大師高校みたいな高校があると、１年間自分の中で学んでから移れる、とってもいいと思います。そういう高校を県教委としてもっと増やしてくれなくちゃ、大師高校１校だけじゃ何にもならないと思うので、その辺のことで、将来のあり方に関してもっと強く進めていくのか。それに絡んだ統廃合なら私は理解します。ただ、一方で、すっぱ抜いた「神奈川新聞」を私は支援したいと思います。すっぱ抜いたからこそ、そういう話が出るんでございましょうから、火のないところには煙が立たないと思っておりますので、そういうふうに思います。

それから石田先生に関しては、私、とても特徴のある学校にいらして、気持ちもよく分かります。

ただ、もっともっと高校の先生方はどう思いますか。入試が変わる前に、なぜもっとみんな騒がなかったんだろうかなと。それに関してお仲間に対する気持ちをお伺いしたいと思います。

黒　沢：ありがとうございました。ほかに何人か、もしありましたら、どうぞ。

諸星（不入斗中学）：中学校の現場にいまして、今2年生なんですが、非常に子どもがいらいらしたり、、落ち着きがなかったり、忙しい生活を送っています。というのも、現在制度の改革を進めても、入試というものがある限り、そういった問題が起きてきていると思います。

鈴木さんに質問なんですが、全入の論議は、こういういろんな改革案が出てくる中でなぜ出てこないんでしょうか。それから普通科推薦の問題については、石田先生が指摘されましたが、オフレコの部分で何か考えがないのかどうか。あるとすればどういう問題や課題があるのか。中学生と接していまして、やっぱり子どもはゆったりと、部活、勉強に充実感を持って過ごしたいし、やっぱりみんなで地域の高校に行きたいと思っている。「入試がなくなったらいいだろう」と言うと、みんなが「そうだよ、先生」というのが子どもや親の本音だと思います。以上です。

黒　沢：どうもありがとうございました。あとどなたか。

高尾（千葉学院・エドペック）：私は塾の立場で、高校全入そのものは大賛成なんですけれども、ちょっと視点として欠落しているのかなという感じがするので、その部分を載せたいと思います。一つは、公立高校の話が中心になっていますけれども、選択する側からすると、今、公立と、先程中学校の先生からお話が出ていましたけれども、私学との併願の問題が出ていました。そういう関係で、例えば公立はどういう位置づけになるのか。あるいは公立と私立とどういうふうに考えていくのかという話が、全く出ていないなというのが一つ感じた点です。

それからもう一つは、高校に進学するときは目的志向を持って行くんだ、選び取れるんだというプログラムが用意されれば、本当にいいことだと思いますし、そうなることが大変望ましいと思うんです。逆に、じゃ中学生が本当に選び取れるかどうかという議論がさっきから幾つか出ています。そのときに、モチベーションをどうやって上げるかという問題についての具体的なシステムのプランがいつも欠落しているように思うんです。ここはあくまでも高課研の話から進んで高校のカテゴリーとして考えているから、そこは切り離されているのかもしれないんですけれども、ちょっとこの問題は解決しないんではないか。中学生のモチベーションアップ、それは小学生からつながってくるかもしれません。そういった部分の具体的プランについてはどうなってくるのか。この辺の話がつながらないといけないだろうと思います。

それからもう一つは地域差の問題ですね。先ほど鈴木さんからお話がありました、同一志願率の問題に関して数字が出ていました。あれはおしなべて見るとそうですけれども、例えば秦野・伊勢原学区なんかを見ると、明らかに中学校側での操作がなされていて、進路指導上、明らかに同一で出しなさいという指導をしていると思わざるを得ない。事実一部そういう声が中学校の先生から言われているという声をたくさん耳にするわけですけれども、そういった問題についてはどうなのかということ。

個々の運用の問題について言い出すといろいろとあると思いますが、そういった話が少し欠けているのかなと思ったので、指摘をさせて頂きました。

黒　沢：どうもありがとうございました。塾の方からで、非常にユニークな質問だったと思います。では、もう一方か二方受けたいと思います。どうぞ。

鈴木（富岡高校）：入試制度ということからは少し外れた話になるかもしれませんけれども、大どころにおいて関係があると思うので、特にどなたかということではなく、ご質問したいと思います。

私の趣旨は、生徒のことを中心に事が考えられているかということです。今までのことを考えますと、例えば行政サイドの方からのいろんな形の話ですと、例えば高等学校における単位認定や、

進級・卒業の弾力化、それから個性を尊重して、多様化した生徒に多様に対応しなさいということ。あるいは今回の入試制度についても、「行ける学校から行きたい学校へ」ということなどは言ってみれば、そういう理念的な部分においては結構説得力があるんですね。そういう面で行政側の対応というものは、先行していた部分があったと思います。それに対して学校現場の実態はどうかと言いますと、先程の単位認定や、卒業や進級の弾力化ということについても、実は私たちは余り以前とは変わってはいない物差しを持って対応しています。

それから個性尊重ということにつきましても、実は行政サイドでそれを進めるんでしょうが、実態としましては、私はかつての新設100校計画における個性化教育の失敗というものを経験しています。さらには「ふれあい教育」ということを言われていますけれども、それがどれだけ実態化したかどうかについても私は疑問を持っています。

それで今回の入試制度を見たときに、今言ってみれば、我々高校現場は、この制度を不合理な制度だということを指摘します。指摘はするけれども、制度が既に始まってしまっている中で、私達に問われているのは、44%の総合的選考の枠にどう対応するかということだと思うんです。その部分において私達の現場における対応が、例えば特色づくりについても、極端に言えば、形だけつくって実態はないんじゃないか、そうも思います。結局行政サイドは形だけの改革というものを常に考えてきているんじゃないでしょうか。

一方で教育現場というものは、面従複背と申しますか、まあ適当になあなあでやっていこうという格好で、実は非常に旧態依然の学校現場があるんじゃないか。そんな中で制度というものが、かなり悲鳴を上げているのが現状だと思うんです。そういうような観点から、どなたでも結構ですけれども、お話を頂きたいと思っています。

黒　沢：ありがとうございました。高校の先生、中学校の先生、それから塾の方、保護者と言いますか、地域の方々からご質問が出ております。具体的な事実関係についてのご質問と、ややご意見を踏まえた意味の質問や意見も出ておりますが、まだ何かありましたら、どうぞ。

広瀬（県教文研）：たくさん質問が出ているので、一つだけ簡単に質問をさせて頂きたいと思います。

コーディネーターの黒沢さんの方から、一番最初に質問があったと思いますが、いわゆる入試の多様化を進めていけば、学校の格差是正が行われるかどうかということです。これは非常に重要な論点だと思っています。それに対して鈴木さんは、アンケートにそういう項目がない、あるいは特色ある生徒が入ってきて、学校が活性化したみたいなことをおっしゃいました。ここで聞きたいことは、学校が活性化したかどうかではなくて、格差の是正が行われる、あるいは行われる可能性があるかどうかということです。

新しい入試制度を導入するに際して、かつて神奈川県の教育委員会のある幹部が、こんなふうなことを述べています。つまり、入試の多様化を進めていくと、高校は学力で入った生徒と、それ意外の方法で入った生徒がミックスされる。これは長い目で見ると、格差是正の方向に向いていくのではないかということです。この発言は「神奈川新聞」の94年7月22日に出ています。そこで鈴木さん、奥山さん、お二人にお聞きしたいのですが、こうした発言のように、今後多様な入試や総合的選考などが行われていくと、学校間の格差が是正されるとお考えになるのかどうか、その点をお聞きしたいと思います。

黒　沢：どうもありがとうございました。まだ質問の時間はあるんですけれども、余り長くやっていると、質問を受けた側が忘れてしまうということもありますので(笑)、とりあえずこの辺で一応区切って、指名されたシンポジストに答えて頂き、また他の方もご意見があったら関連して答えて頂きますので、よろしくお願い致します。

それでは順序はよろしいでしょうか。答えられる限りで構いません。それでは最初に、石橋さんの方から公教育の無償制、その辺との関連で問題があるかという質問だったと思いますが、どちらからでも。

鈴木（彰）：塾と予備校の件ということで、今、石橋さんの方から質問がありましたが、実際にこの制度を導入したことによって、塾へ通う生徒が増えているとか、そういった情報は私どもの方にはないんです。

また、先程言われてしまったんですけれども、一応今回この場ではアンケート結果を中心にしゃべっていますから、そのことについてお答えさせて頂きますと、今年のアンケート項目の中に、受験する高校の決め方についてという項目がございまして、これは昨年もあったんですけれども、自分で決めたというのが69.6%、昨年が55.2%です。それから主として中学校の先生の意見をもとにしたというのが12.1%、昨年は16.5%ですから、若干落ちているということですね。それからこれが答えになるかどうかわからないんですけれども、主として塾の先生の意見をもとにしたというのが2.9%です。昨年が3.5%ですから、明らかにそういった意味では塾の先生に聞かないで自分の決めていることがこのアンケートでは出てきています。あと保護者など家族の意見をもとにしたが10.8%、昨年が17.8%です。その他として4.2%、昨年6.4%、無回答が0.4%で、昨年が0.6%ということで、この結果を見ますと、昨年に比べて自分で決めたという方が非常に増えているということでございます。それに引きかえ、塾の先生の意見をもとにしているというのが一番低くて、しかも、それが若干ポイントを下げている状況でございます。

黒　沢：済みません。ちょっと飛びますけれども、そのアンケートの内容について稲森さんの方から出たんですが、関連しますので、最初にお答えいただければと思います。

鈴木（彰）：これは昨年も今年も5月に実施しまして、7月頃に記者発表させて頂いているものなんですけれども、34校、普通科18学区につきまして均等に、それに専門学科、総合学科ですね、こういったものを含めてやっています。

当然1年生を対象にしておりまして、今ご質問があったのは合格者だろうということなんですけれども、不合格者を特定してアンケートをとるのは今のところ不可能です。逆に「不合格」になっている方にアンケートをとることはできます。それはどういうことかと言いますと、私学併願の方ですね。つまり、公立を落ちて私学に行っている方についてアンケートをとれば結果が出るわけです。そうすると、これでかなりの信憑性が出てくるということで、私共は昨年から9年度、10年度の選抜につきましての検討の中で、私学協会に申し入れております。やらせて頂きたいと2年越しでお願いしていますが、残念ながらこの件については、まかりならぬということになっておりますので、そういう意味では大変申しわけないんですけれども、要するに、合格者だけのアンケートになっているのでございます。

黒　沢：少し順序を逆にしまして失礼しました。高校教員の早川さんの方から、かなり原理的な問題等が4点出ています。第1点は私が質問したこととも関連するかと思いますが、これは奥山さんに対する質問が主だったと思いますが。

奥　山：向の岡高校の先生からご質問を頂いた件について、簡潔にお答え致します。

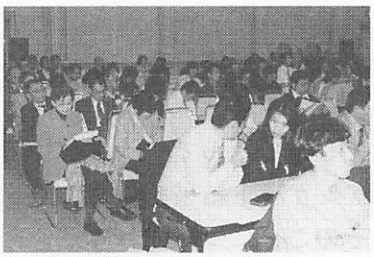
まず第1点、中学卒業時点で自らの個性をきちんとつかんでいるとするのか。これは黒沢先生の先程のご質問と同様で、私が聞いた協議会の委員さんの意見の中でも、9割はまず曖昧模糊としているのではないかということでございます。これは多分誰が見ても中学3年の時点では、例えば「私は将来弁護士になる」、あるいは「将来証券マンになる」とはっきり言う人はなかなかいないんじゃないかと思います。ただ、どういう方向に進むかの大枠が大体見つかっているならば、そこで例えば専門学科という形もありますし、先程るる説明させて頂きました、総合学科という道もあるだろうと考えています。

それから次の失敗を恐れないという問題ですが、これはお答えする前に、どうしてこういう教育の話が出たのか、先程は少ない時間で説明を漏らしている部分がございます。私の資料の3ページをごらんになって頂きたいのですが、こういう教育理念に立って、一体どういう具体的な対応が求められる

のか。例えば3ページの（2）の柔軟なシステムの実現、この中で申し上げますと、ロの転編入学の弾力化、こういったところで見えてくるのではないか。今まで一つの高校に入ると、いやがおうでもあの先生と3年間お付き合いをするんだと。ところが転編入学の弾力化がますます広がっていけば、自分の意思でもう一度やり直しますというふうな、言ってみれば、失敗を認めトライできるような形になろうかと思います。あるいは中途退学につきましては、総合高校で中途退学の募集枠が確かあったと思います。こういう新たな取り組みがどんどん増えてくれば、一回こっきりじゃなくなるんじゃないかと思っております。

ただ、先ほどの推薦入試、1次募集、再募集と受験し落ちて、ますます失敗を生むという話ですが、これは見解の相違で、私と致しましては、選択の回数が増えた分それだけ本人にとってはプラスになっている部分もあると思います。物事を暗く見ると、そういうふうになるんじゃないかと思います。(笑)

次に、入試制度をどうしても使わなきゃいけないのか。これにつきましては、実は昨日、今日と、先ほど石田先生からもお話がありました、作文を入試に取り入れるという話もあります。これはこれから先のことですから、県教委がどうするとはなかなか言えないと思いますので、個人的な見解にとどめさせて頂きたいんですけれども、よく新聞に登場されます文部省生涯学習振興課長の寺脇研さんは「昔、生徒がたくさんいて、それで学校が足りなかったときには選抜をやらざるを得なかった状況だった。少子化でもって、今、学校が子どもの数に比べて多くなってきた場合には、逆になるんじゃないかというお話をされていたと思うんです。私は試練という意味では、ここで選抜というのは残した方がいいんじゃないか。それは決して学力じゃなく、例えばお見合いと同じで、推薦という形でもって面談して、君はこの学校に本当に合っているかどうか、お互いに目で見ながら、話し合いながら、その中で培っていくのがいいんじゃないかと思っています。そういう場面が必要だと思うんですが、将来、今のような形の入試は、私は変わってくるのではないかと思っています。



それからもう1点、進路が明確でない子どもに対して、例として総合学科の大師高校を少し報告させて頂いたんですが、これを増して欲しいとのご意見。正にこのお話は大変ありがたくて、4ページ目をごらんになって頂きたいんですが、答申の概要の中に出ています。（3）特色を生かした適正配置、その中でイの総合学科への再編整備としまして、「既設の普通科高校や専門高校を統廃合して、発展的統合や改編により通学可能な範囲に設置し、なお、将来には各学区に設置することを期待する。」経済的に大変だと思ってはいますが、時間をかけていきたいと思っております。

黒　沢：大変ありがとうございました。今、稲森さんの質問にも答えて頂いたと思います。4番目の横須賀の中学の先生から、全入を考えていないかと…、これについてはいかがですか。

鈴木（彰）：全入の件でございますけれども、入試とあるところでは連動していますが、この会でそういったことについての私ども見解は、今回ちょっと差し控えさせて頂きたいと思います。

黒　沢：ご出演をお願いしたときに、答えられない問題も出てくるだろうということでした。私が最初に申しましたように、今後の課題として当然それは出てくると思います。先ほど奥山さんの方からは、個人的な見解ということで、試験の廃止とは違うけれども、一定程度のそういうことは可能じゃないかという答えがございました。そういうことでちょっとご勘弁を願いたいということでございます。そうですね、では、普通科の推薦についてはいかがでしょうか。

鈴木（彰）：普通科の推薦につきましては、オフレコでもいいからということですけれども、実際、高課研の報告の中では、普通科の一般コースの推薦入学の導入については、今後の社会情勢の動向等も見極めながら、なお検討することが必要である。こううたわれているわけです。それを受けま

して、改正大綱はユニークなつくりになっておりまして、本文は左側に改正大綱の条項が出ているんです。その右側に解説がついているんです。この点は非常にユニークですが、その解説の部分で、なお、専門コース以外の普通科については今後の課題とし、引き続き検討していくということで、先送りになっています。今後の課題ということですが、ただ、条件としまして、全国を見ますと、首都圏の中では神奈川県だけが普通科に推薦を導入していないという状況でございます。それが我々の課題ということでございますから、そういった他県の状況等は常に調査検討しているということでございます。

黒　沢：ありがとうございました。それでは5人目の塾の方からのご質問ですが、モチベーションの問題です。中学校の進路指導がちょっと遅れているんじゃないかということを主にした質問でした。これは中学校の先生に答えて頂いてよろしいでしょうか。先生のご経験でも構いません。少々言いにくいところがあるのかもしれませんが。

高　尾：そうではなくて、モチベーションアップのシステム的なことが、今日の話では欠落しているように思うんです。

黒　沢：県の行政に対してでしょうか。

高　尾：そうですね。むしろ、高校を変えますし、主体的に選びとれます。でも、選ぶためのプロセスはどこで培われるのかということ。小学校なのか、中学校なかの、そういうことは具体的にシステム化されているのか、そういうことってないわけですね。

黒　沢：そういう研究も含めてですか。

高　尾：それをどうするのという話では、どうもその手の教育改革の話の中では、どこからも出てきていないように思うんです。

黒　沢：わかりました。取り違えまして、どうも失礼しました。今お話しくださったことで、中学で選択ができるかどうかということもお考えと思いますが、県の方でもしお考えがあれば答えて下さい。

奥　山：今非常に貴重な意見を頂きました、ありがいと思っています。実のところ、将来構想の答申の中でも今お話しの通り、高校が変わろうとしたって、高校だけで変われるわけがない。その前後が変わらなきゃだめだよというお話をもらったんです。ですから、中学の進路指導はもちろん大事ですし、受け入れ側の大学、さらに言えば企業、そちらの方が変わらなきゃいけない、そういう方向性は頂いています。

ただ、おっしゃるとおり、モチベーションとしてどういうふうなシステムを考えているのか。これは今のところ考えていかなければいけないというところでしかお答えができません。ただ、考えられる一つの方法としては、隣に中学の先生がいらっしゃるので厳しいんですけれども、とにかく進路指導というのが有効な手段として生きていけばいいなと思います。

黒　沢：いろいろお話を頂いたと思いますが、今、中学校の先生で、先程塾の高尾さんがおっしゃった件ですけれども、実際には中学の現場ではそのことについて、何かご意見がありましたらお願いします。

河　村：最初に話した進路指導と進学指導のギャップという点にかかわって、入試の件がやっぱり大きなネックになっているのかなと。1、2年の進路指導で育てようとしている自分で選択して、自己決定をしていく力というのが、進路決定の場面ではなかなか生かすことができないということがあると思います。

黒　沢：ありがとうございました。はい、どうぞ。

鈴木（彰）：今の件につきまして、関係者からいろいろご意見、ご指摘をもらっているということを先程申し上げましたけれども、その中で私どもは中学校の進路指導担当者の方にお集まりを頂きまして、多い人数ではないのですけれども、12～13名でしたか、進路指導のお話を聞いた中で、生き方指導に基づく進路指導が定着化してきたというご意見も頂いておりますので、やはり今までの措置だけではなくて、そういったものも含めて進路指導が行われているのではないかと。そういう意味では生徒が変わると同時に、新たな面が出てきていることが、関係者の意見の中にあったということだけお知らせしたいと思います。

黒　沢：それでは6番目に高校の鈴木さんの方から、改革がちょっと分かりにくかった点もあった

んですけれども、生徒中心ということが忘れられているということでしょうか。形式的に流れているということでしょうか。

鈴　木：本当に目を据えた改革であるのかという趣旨です。

黒　沢：具体的に言うと、どういうところに支障を感じますか、１点だけでも結構です。

鈴　木：この入試制度に関してですか。

黒　沢：ええ。

鈴　木：入試制度に関して言うならば、先ほどの塾の先生のお話とはまっく違うんですけれども、塾に行っている中学生の割合が65％～70％と言います。そして95％の進学率の中では、言ってみれば、たとえば高等学校に行こうという意思を持っている者がほとんどなんですよ。今、中学生が塾に行っている時間を考えたときに、高校間の格差というものは、結局是正されていかないんじゃないかという感じがします。そのことを捉えていったときに、本当に44％の総合的選考の枠の中で行きたい学校を選んで、そこが保証されるのかということです。一方高等学校側は本当にそういうことの対応ができていくんだろうか。この部分になってくると思うんです。それは今単位認定のことで、まとめた方がいいでしょうけれども、その辺をちょっと。

黒　沢：それはご質問でしょうか。ご意見ではなくて。奥山さんにというご質問ですか。

鈴　木：いえ、特にどなたにということではございませんけれども、そう考えていますので、こういうことに関して…いかがでしょうか。

鈴木（彰）：……入試というのはちょっと納得しないんじゃないかというご意見に聞こえるわけでございまして、それで総合的選考という、もとになっています選考に当たって重視する内容ですけれども、これは毎年、各学校に資料づくりとあわせまして、今年はどういった形のものにしていくのかということで回答をお願いしているわけです。ちなみに平成10年度から11年度にかけまして、つまり、来年に向けて重視する内容を変える学校はかなりあります。具体的な数で言いますと、46校あるわけです。ですから、全体で182（全日制）ありますので、過渡的な状況ということで、それぞれ改善段階にあるわけですから、入試制度の選考に当たって重視する内容を改善していくということで、何とか追いついていくようなことになろうかと、こういうことです。

黒　沢：どうもありがとうございました。先程若干時間に余裕があるなんて言ってしまったんですけれども、だんだんなくなってきました。予想されたとおり（笑）、県側との質疑応答のようになっている感じがしますので、最後に広瀬さんが質問された今度の基本的問題とも重なるんですが、それにまずお答えを頂いて、次に他のいろんな先生方、保護者の方々とのご意見のやりとりに移りたいと思います。

鈴木（彰）：逆にお聞きしたいことがあるんですが、関係者の方から、リーダー性を持つ方が出てきているという話をしましたね。あるいはご質問の中にもありました格差というのはどういった面ではかっているんですか、ということです。リーダー性というのも、生徒の個性だと思うんです。それが今までなかった学校に出てきたということは、やはり格差是正じゃないでしょうか。

だから、逆に、先に質問された方は、格差とは何なのかということを知りたいと思う。要するに数値ではかれるものであると言うんだったら、やっぱり趣旨が違ってくるんじゃないか。こう反論させて頂きたいと思います。

黒　沢：では、ご質問された方々にはシンポジストからお答えをして頂いたので、これから意見をどんどん出して欲しいと思います。あるいは今のお答えについて、ちょっと問題があるかなあということも含めて…。それではどうぞ。なるべく多くの方にご意見を頂きたいものですから、論点は一つにしぼり、内容も簡潔にお願いします。

松本（久里浜高校）：今議論を聞いていまして、今までア・テストがあって、学力テストの点数ではかっていたが、特色入試というのは、それぞれの人間的な部分を重視する方向で選ぶという形で、今の流れは理念的に正しいと思うんです。しかも、試験回数が増えるということですし。ただ、まだ100％確実だというところでの移行はできないと思うんです。やはり問題点を幾つか抱えながら、理念的には正しい方向に向かっていく形ですから、今までどおりの学力の輪切りよりはいいと思いま

す。中でも最大の問題点は、重視する44%の部分が、実際見てみると、やはり学力部分に偏っている内容が極めて強い。3教科にね。それから部活、生徒会は基本的に今までと同じ。今回本当に生徒が主体的に選ぶのであれば、芸術のこういうものがあるからとか、あれができるからといった観点で選ぶのが本来の趣旨じゃないだろうか。そこが欠けている。実際、私の知る範囲ではそれで実施されている高等学校は極めて少ない。そこで特色づくりというのをどうこれから進めていくのかという観点と、あと1点は、多様化とか、重視するとかいうのであれば、入試の部分ですね、推薦枠とか、入試そのものまでもある程度学校側に権限移譲というか、学校がこういう特色を出すのなら、その特色に応じてこういう入試をしたいということがなし遂げられて初めて完結するんじゃないかなという部分も考えているんです。ですから、166校（県立）が同じ入試システムでやるというのはどうでしょうか。そこまで踏み込む自信があるのかと、県教委の方にお伺いしたい。

黒　沢：高校の先生でいらっしゃいますか。

松　本：はい、そうです。

黒　沢：どうもありがとうございました。会場にはもっといろんな学校の先生がいらっしゃると思いますので、何でも結構です。ご発言をどうぞ。

八島（中沢高校）：今お答えになっている、課題集中校に当たるかと思いますが、意見の中で、格差是正の問題があったと思います。本校はいろいろな問題がありまして、入試制度が変わりまして、プラス面としては、クラブ活動が多少積極的になってきたなということがあると思います。ただし、ご存じのとおり、生活指導ではいろいろな問題が多発し、昨年を上回っています。

また、学力の面も、この2年間を見てきて、やはり落ちていると言わざるを得ません。基礎学力の面です。それから退学者がやはり増えています。私の学校は毎日相当厳しい生徒を抱え、日々教員は厳しい生活をしております。「個性を重視する」という言い方や「人それぞれの多様な進路に応じて」という言い方をされますけれども、現在こういう問題を抱えている、格差を抱えていることに対する配慮を抜きにしては、今議論されているようなすばらしい内容も、絵に描いた餅になるんじゃないかと危惧をしております。

それから、奥山さんからいただいた資料の中にも書いてあるんですが、生徒の学級定員ですね、30人学級で組合の方でも取り組み始めました。本校ではこれを20人ぐらいにしても実際成り立たないという話が職場の中で出てきています。その意味では、こういった長いスパンの議論と同時に、今日、明日やっていくことをきちん受けとめて、実り多い議論をして頂かないといけないと思います。奥山さんの資料の中に、40人学級を主体に続けると書いてございますが、そういった意味できめ細かくいろいろ見ていきますと、個性重視と多様化は、実際私の学校から見ると不可能です。

1人1人本当にいろいろバラエティーでありまして、いろんな問題も抱えております。不可能です。したがって、現実的な問題をきちんと押さえて今後実行して頂きたいと思います。

入試改革については、プラスの面は少しありますけれども、必ずしも格差が改善されていないと私は受け留めております。

教育の議論の中ですばらしい内容があり、賛同するところが多いんですけれども、経済的な保証という意味で、統廃合云々という形で、教育の条件を狭めるというのが今少し気になりましたので、言わせて頂きました。

黒　沢：どうもありがとうございました。中沢高校の先生の方から、条件整備に関する統廃合の今後の論議についてという新しいご意見が出ました。その他いかがでしょうか。問題が高校入試ということで、やや専門的なことでもあるんですけれども。女性の方、先に手を挙げられたので。

中野（県教文研）：鈴木さんでも、奥山さんでもよろしいんですが、2点伺いたいことがあります。

1点目は、選抜の柱のうち6割を占めている学習の記録についてなんですけれども、現在相対評価で評価がつけられていますけれども、母集団の

性質が様々なのに中学校で相対評価をするということが、ずっと前から私は疑問だったんです。例えばA中学では英語のできる生徒が多いのです。90点以上取っていても５段階で３がついてしまう可能性があり得る。またそれがB中学に行けば、同じ力のその子に５がつく可能性がある。そういうことが現実にあると思うんですけれども、なぜ相対評価でなければならないのか。絶対評価になった方が、子どもたちの成績というものが、到達度による評価となると思いますし、定期試験の時のプレッシャーというものもかなり変わってくるんじゃないかと思うんです。将来的に絶対評価でと、そういう構想はないのかどうか。

２点目なんですけれども、不登校の子どもが10万人を超えているという現状で、不登校の中学生の進学についてはどういった対策を持っていらっしゃるのか。現実では不登校の子どもたちが公立の高校に進みたいと思えば、定時制か通信制にしか行けないというのが現状だと思います。もちろん定時制、通信制にもよさがあり、何でもかんでも全日制でなければいけないという価値観は壊していかなければいけないと思いますけれども、全日制の学校でたくさんのお友だちと一緒に部活とかもやりたいのに、不登校であったから定時制にしか行けないという、現状はやはり不平等だと思うんです。その改善に対してどういう構想を持っていらっしゃるのか伺いたいと思うんです。

黒　沢：中学校の先生でいらっしゃいますか。

中　野：教育文化研究所の教育相談員をしております。

黒　沢：どうも失礼しました(笑)。ありがとうございました。

池上（横浜平沼高校）：少し意見が違うかと思うんですが、入学試験で高校の格差是正を求めること自体が無理なんではないかと感じます。むしろ条件整備の方が重要な意味を持ってくるのではないかという感じがします。この議論の中でもう一つ忘れられているのは、小学校から中学校に来る段階で、４分の１ないし５分の１の物差しがある。こういう議論も出てきているという状況があるだろうと思います。

それからもう一つは、一方において大学審は、大学の入学レベルの維持のために、入試の科目を増やすという議論が始まったという話がありますけれども、むしろその方向性にあるんじゃないか。私は、高校入試は学力だけでいいと思っていますけれども、高校入試を易しくすることは大きく間違った方向に歩み出すのではないかという感じがします。単位制だとか、あるいは総合側だとかいう学校に期待を持たれている感があるようですが、先週、全国の高校が200校ぐらい集まる会議に出席をしました。文部省の方もお見えになったわけです。例えば東京の都立北野高という学校ですけれ

ども、あそこは単位制の進学校という趣旨で、本来の目的とは全く違う形の学校になりました。神奈川県からは、総合高校の校長先生が発表されましたけれども、大変立派だという声があった反面、私の後ろの方では「神奈川県は金があるからいいね」という声がして、それは東北地方の高校の先生からで、そうした実態もあるということをご紹介したいと思います。

黒　沢：どうもありがとうございました。入試の問題で格差是正というのはちょっと無理ではないかということですね。むしろ条件整備でというご意見です。その他、実際に出られた全国的な集会での単位制高校等の情報のお話もありました。もう少しご意見を頂いて、シンポジストの方で答えられるものがあれば答えて欲しいと思いますが、いかがでしょうか。

伊藤（神教組）：小学校の教員をしております。

まず、新しい入試制度が、実効あるものになっていくためには、子どもの立場から見ても、高校間格差というものがない中でこういった制度の形があれば、地区に応じて純粋に選んでいけるのではないかなと思います。一番子どもたち、あるいは保護者が気になるのは高校間格差、つまり、地域で自分がどういう位置にあって、その高校に入れるのかということが非常に大きな関心事になっていると率直に思うわけです。

それで中学校３年生の段階で、進路希望調査を

受けるわけですが、これが秋なんです。10月か11月ごろです。そうすると、既に高校の箱が決まっているところへ進学希望調査が入ってくるということです。したがって、自分の方向性が進路指導等の中で決まってきてしまう現実があるわけですから、本当の希望になっているのかどうなのか。本当の希望というのは、子どもが自分の将来や、自分の周りや、先輩や、自分が高校でやりたいことを考えた上で希望が出せるものなんじゃないのか。だとすれば、その希望の調査は前に行われていて、全くそのとおりに高校ができるとは思いませんけれども、その希望に基づいて、希望枠に沿った高校の箱ができるべきなのではないかと思います。

それから、特色に応じた学校づくりなんですが、子どもの立場からすれば、既にその形で2回、高校に入っているわけですね。その特色に応じた学校のサービスが受けられなかった場合に、子どもに対してどういうふうに返していくのかということです。サービスが受けられなければ、お金を戻すという話になるわけだけれども、特色で受けて、そしてその子どもを合格させるのは高校ですから、高校はその子どもを3年間見るということを前提に契約したわけですね。しかも、その高校の特色を授業にして、あるいは学校生活として保証するということで合格をさせているわけですから、それができなかった場合には、どういうふうに子どもに保証するのかということについて、答えて頂ければと思います。

それから中途退学についても、僕は小学校に勤めているので、小学校でも塾に行くという厳しい部分もあるわけですけれども、基本的には子どもに合わせた教育になるはずだろうと思うんです。確かに高校は義務教育ではありませんし、現状、神奈川でも96%高校に行っているわけですから、非常に幅のある子どもたちです。それがたまたま高校間格差というものも十分是正されていないわけですから、いろんな問題があるでしょう。それでも、子どもの実態にどう高校が合わせるのか。さっき教育条件整備の話もありましたが、そういう観点と合わせて、システムとして子どもの実態に合わせた教育づくりができるようになっていないと、結局いつまでたっても中途退学の子どもたちは出ざるを得ないんじゃないかと思います。

従がって、そういうところの施策を将来構想の中でどう展開していくのかということを、県民にわかるような、そういった方向性が必要なんじゃないかなと思います。以上です。

黒　沢：どうもありがとうございました。特にご意見があれば、あとお一人か、お二人お聞きしたいと思います。それでシンポジストの方にお答え頂き、まとめの方に入らせて頂きます。

外山（秦野高校）：先程学校間格差ということについて話があり、そして鈴木さんの方から、その格差というものの考え方がやはり問題じゃないかと、切り返された形になっているわけですけれども、私は学校間格差、これは学力間格差だと言ってもいいと思います。学力間格差そのものが、現実にはさまざまな生徒会活動にしても、あるいは部活動にしても、偏りをもたらしている。そういう現実があるんじゃないか。そういうふうに思っています。

学力間格差でも、学校間格差でもいいんですが、とにかくこれは相当意識的になくしていこうという意思が外に見えてこないと、やはり子どもたちにとっては、それこそ開放された個性あふれる、自分の意思決定みたいなものはできないのではないか。そう私は考えます。学校間格差をなくすんだというこちらの意思がきちんと見えるということが、とても大切なことなんじゃないか。そういう意味では、先ほど黒沢さんの方から呼びかけられて、その学校間格差に対して、きちんと立ち向かうという姿勢を、県の方でもぜひ盛り上げて欲しいなと思っています。

もう1点、この格差は親の経済的な格差みたいなものとやはり連動していて、幾つかの学校で調査をすると、例えば授業料を引き落とす際に落ちない、生徒なんかもいわゆる学校間格差が反映されています。上位校では滞納するといった生徒はいないけれども、もう一方では割合多いんだという傾向もあって、やはり親の経済間格差

が反映されている。学校間格差というものに対しては、県の方から相当見える形できちんと打ち出すことによって生徒自身が自分の個性を自由に伸ばせる。そういう大きな条件づくりになるのでないかと思っています。

黒　沢：どうもありがとうございました。最後になりますので、簡潔にお願いしたいと思います。

早川（向の岡工業高校）：先ほど、私は現在の制度に対しての質問をしたんですが、まだ制度としては確立していない、答申の段階のことで返されているんですね。ということは言い方を変えれば、問題があるということを認めたということになるわけですよ。先ほど編入学の弾力化をしろと、そういう話がありました。これはまだできていないわけです。現実に私の生徒がこの間佐賀に行ったんですけれども、向こうの学校が合わないので戻りたい。保護者は佐賀の方にいるんだけれども、こちらの方にお兄さんがいるから戻したいんだという。これは認められませんでしたね。つまり、試行錯誤を認めない。県教委は戻ることについてだめと答えました。これが事実です。

それからもう一つの事実として、これは言っておきたいんですけれども、今後は推薦制度は来年30%で県に出します。ある学校では40%で出しました。この2校は絶対にだめというので戻されました。そして校長が、何回も職員会議を開いて、「私は50%をお願いする。これ以外ありません。工業高校は県内すべて50%の推薦です」と、これですよ。どこが弾力があるんですか。どこが個性尊重なんですか。個人の個性を尊重するということをおっしゃるならば、学校ごとの個性を尊重すべきです。それはない。画一化を強制しつつ、個性を言うことのおかしさというものを私は実感をしています。

もう一つ、選抜を幾ら言っておってもだめですね。つまり、学力以外で入るものをつくりたい。学力偏重はだめだ。逆に言えば、学力がある者が落ちることされるわけですね。今まで入れた者が落とされるという制度です。選抜制度というのはそういうもんなんです。先程私は、複数化するということは落ちる回数を増やすだけですよと申しました。これは事実でしょう。これは間違いない事実です。落ちる回数は確実に増えるんです。だって入る人間を変えていないんだから、ということなんです。

だから、選抜制度を幾らいじったってだめなんだということなんです。例えば、私が是非お願いしたいのは、学力以外の観点でもって入れた生徒は、学力以外の観点でもって卒業させなければならないという事実、ところが、そういうことになっていませんね。今の高等学校の教育制度はそのようになっていません。これは当たり前のことなんです。入れるからには、その生徒の学習権をいかに保証するかという観点がなければだめなんです。学力以外の観点を出すならば、高等学校の中でも、学力がひどくても、学力の格差があっても、それを認めていく。そういう観点でなければだめなんです。しかし、今の制度の中ではそれはありません。なぜならば同じ教室で同じように教えなければならないということになっている。それだけの人間を保証していないからです。教師も、施設も、設備も、人間も、教育内容も含めて、そういうものを保証していない。入口だけを幾らいじくったって、そういうものを保証しなければだめだと思う。

そして今回出された、長く言うといけませんので、一言だけ言わせてもらいますけれども……。

黒　沢：また一言なんですか。(笑)

早　川：おしゃべりなもんで、どうも申しわけございません。(笑)

このあり方の答申を見ても、その答えは組替えと言わざるを得ない。入試制度をいじくるならば、その生徒の行く末も保証しろということを強く訴えたいと思います。以上です。

黒　沢：最後に言われたことが本当に言いたかったことなのだと思います。(笑) どうもありがとうございました。

それでは時間がなくなってきましたので、今出ていることにすべて丹念に答えることは不可能でございますが、シンポジストの方から、主として県に対する質問であったと思いますので、全体的にお答え下さい。まず鈴木さんから。

鈴木（彰）：久里浜の先生から出たもので、44%のことで、学力偏重じゃないかという話がございました。各中学３年生に全員配っている募集案内では、学力だけを記載している学校はないんですね。必ず特色ということも入っているわけです。その比重というんですかね、それにつきまして各学校で若干違うということだと思います。

「産経新聞」の10月13日の夕刊と14日の夕刊に「じゅく～る」ということで、「新神奈川方式の総合的選抜基準」というふうに、校内の選考基準などが抜粋されて出ていました。それを見ますと、確かにそういった面が見られる部分もあります。

それから、学校によって全く逆に教科外活動を重視している学校もあります。

それから、不登校の生徒さんの入試についての取り扱いなんですけれども、これは平成10年度から東京都でやられたことで、私ども神奈川県も11年度からこの扱いが入ります。ある欠席日数を超えた方につきましては、内申点、つまり調査書の「学習の記録」の評定を見ないということで定めさせて頂きます。ですから、この生徒さんにつきましては、資料の整わない生徒という形で選考されます。この資料の整わない生徒の扱いについては、各高等学校の方にそのやり方につきましては、プリント等をお配りして、説明ももう既にしてございます。ただ、日数等の通知につきましては、11月の下旬ごろに中学校長を通して中学校へ、それから高校長を通して高校へという形になろうかと思っています。

黒　沢：内申の相対評価についてお答えがございましたら。

鈴木（彰）：内申の相対評価につきましては、これを絶対評価にするということは、逆に言えば、その学校のつけ方にむしろばらつきが出て、要するに選抜資料なんですから、選抜資料としてのある根拠を持たせるということで、それを７%とか、24%という形で定めさせて頂いて、選抜資料に使っているわけです。絶対評価への移行というのは難しいんじゃないかと思っています。

早　川：それが５割もあるんだな。減らすことはないの。

鈴木（彰）：５割ですか。

早　川：それを１割ぐらいに。

鈴木（彰）：それについては高課研の委員にもいろいろご論議をいただきましたし、5:5にするとか、6:4にするとか、実際、全国の状況を見ますと、4:6とか、5:5とか、6:4、各学校で選択できるとか、そういったところの入試選抜を行っている県もありますので、実態はそういうことです。

奥　山：時間がございませんので、飛び飛びになって済みません。

まず中沢高校の先生から頂きました、課題集中校の問題ですけれども、これは協議会の中でも今後の課題として受け止めております。しかも、高校フォーラムを県内で３回開いたんですけれども、その中でもこの問題について意見を頂きました。どういう形で答申の中に盛り込んでいるのかということで、今日配られた概要の中には出ていないんですが答申そのものを見て頂きますと、目的意識、学習意欲に欠ける生徒、そういう方々も存在するんだ。こういった人たちが一部の高校に多く見られる、そういう傾向もあるということを認めて、それでどういう対応をするのかを、具体案の中で幾つか盛り込んでおります。

先程お話を頂きました、例えば小集団学習ですね。こういった形で、その意味では40人学級をもっと細かくというお話もありました。具体的にはそういうことも個別にやっていった方がいいだろう。条件整備の方でそういうことを考えていく必要があるとしています。

それからもう１点、子どもの実態にどう合わせていくのか。中退する生徒がこのままのシシステムだと、どうも減らないんじゃないかというお話も頂きました。これは今回のシンポジウムの主体のテーマの学校間格差にもつながってくるんじゃないのかと思っているんです。答申の中でも、この学校間格差についてどうするかということが触れられております。

一つには、何遍も繰り返しますけれども、多様で柔軟な高校教育の展開、この中で生徒が様々な観点から高校を選べるようになるには、やはり特

色づくりを今後どんどん進めていく必要がある。その結果、高校間の序列意識が見直されるんじゃないのか。こういうふうな考え方に立っております。要は一つの物差し、学力だけの物差しで今までやってきたわけですね。ここで入試が変わったということで、学力以外の評価という新しいもう1本の物差しを立てたわけです。まだ2年目なんですけれども、私はこれは画期的なことだと思っています。戦後教育の中で、それこそ頂点の大学を目指して中学から勉強して高校に入って、高校から大学に入っていく。私は、これは本当に気の毒だし、よろしくないと個人的には思っています。

そのためにもこういう格差是正の入試の取り組みと合わせて、その受皿として高校がどれだけ変わって、どれだけバラエティーに飛んだ特色を打ち出せるかが重要になっていくる。これはきょうお集まりの高校の先生方にぜひお願いしたいことです。自分たちの高校にはこういうものがあるんだ。だから、私の高校に来なさい。生徒が減るんですから、奪い合いになると思うんです。それも後10年なんです。そのときに「特色特色ってみんな同じことやっていたら、特色がなくなるだろう」なんておっしゃっている方もいらっしゃるんですが、とんでもございません。教育委員会は枠として特色づくりという形を出して、その中に何を盛るのかはそれぞれ高校が考えることになります。それを目指して生徒さんが、そのときに主体的な意思に立って選べれば、私はこれからの県立高校は決して暗くないと思っております。

黒　沢：どうもありがとうございました。お二方、何かございましたらつけ加えて頂ければと思うんですが、時間がほとんどないので、ほんの一言ぐらいで済みませんが。感想でも結構です。

河　村：感想ということになるかと思うんですけれども、中学校側として送り出す立場では、目標として希望者全入を見据える中で、理想に近づくために、何かいろいろ細かい課題が出てくることは否めないと思うんです。しかし、今出てきている課題は、そこに向かっているとは現時点ではちょっと思えない状況にあります。何か先の見えるような道筋が示された中で見えてくる課題であれば…ということです。

それから中学校現場は非常に忙しくて、いろいろ課題意識を持っている方は多いんですけれども、向き合う余裕がない。実際にはもう既に進路の準備が始まっています。そういう中で生徒そのものへの問題点とかを考える余裕もなく動いているような実態もあります。新しい制度が3年目を迎えて課題を抱えながらも、何となく慣れてきてしまっている。そんな雰囲気も感じています。ですから、高校だけではなくて、中学校側からも課題を指摘していく声を上げていかないといけないんだということを改めて感じています。以上です。

黒　沢：どうもありがとうございました。最後になりましたが、高校の石田先生、お願いします。

石　田：一つは、アンケート調査については是非慎重にして頂きたいと思います。例えば先程お話したように新入生と面接をして、「君が本校を受けたのは自分で決めたのか」という質問をします。そうすると、大抵の子が「自分で決めました」と言うんです。「あっ、そう。どうしてこの学校がいいの」というふうに次の段階にいくと、中学校の先生が、「おまえの行けるところはこの学校と、この学校と、この学校と三つある。自分で選べ」、で自分で決めた。こうなってくるんです。すべてこれで来たとは思いませんよ。思いませんが、そういう子が次から次へと出てくるんです。4月に入ってきた子どもたちに面接をすると、そういう話がポンポン出てくる。1遍のアンケートでは真実は見えないと思います。

さらにそのアンケートですら、読み方で大分違ってきます。同じアンケートを市民団体が分析をしますと県教委とは大分違います。それと、見ると視点が違うと変わってくるだろうということもつけ加えて、ぜひ慎重にお願いしたいと思います。

あと、多くの先生方が私と同様のことを言われのので繰り返しませんが、特色をそれぞれの学校がつくって、生徒を振り分けるというのは、学校に生徒を合わせているんですね。そうでは

ないのだろう。やはり学校側が、来た生徒に合わせるようなシステムをどうつくっていくのかということの方が大事じゃないか。選抜から選択へと言いながら、今日の話は選抜、選抜のことばかり出ていましたね。選抜色一色なんじゃないでしょうか。冒頭で言いましたように、入試というものもなくすことができるように、やはりそっちの方に向かっていかなければならないでしょう。

仮にたくさんの学校がそれぞればらばらの特色をつくって、そこに生徒が行くというのであれば、なおさらのこと入試で競争をさせることをやめない限り、その趣旨は生かされないだろうと私は思います。以上です。(拍手)

黒　沢：どうもありがとうございました。今日は皆さんから活発なご意見がたくさん出されまして、本当にありがとうございました。最初に申しましたように、今日のシンポジウムはほんのスタートラインだと考えますが、言い残した問題があろうかと思いますが、それは今後への楽しみに致しましょう。(笑)

小学校の先生から保護者の方々、中学校、高校、それから大学の教員に至るまで発言者は多岐にわたりました。また、幸いにも塾の方からも、大変ユニークなご質問等を頂きました。

まず私が最初に申しましたように、格差というものが現存していて、これを何とか是正しなければならないのだということでは、共通の理解があったと思います。14期の中教審以来いろんな答申が出ていて、それに沿う形で県も“軟着陸”を図ったのが、今回の入試選抜の実施だったと思います。この具体的成否については意見が当然ながら分かれまして、100%までいかなくても現向の方向に今後も向かっていくべきだという意見と、そうではなくて、非常に大きな問題を残しているんじゃないだろうかという反対意見に分かれました。これはそれぞれの立場の違いでやむを得ないと思います。今後ともこの点は現実に基づいて立証しながら、様々な立場の人々の見解を頂きたいと思います。

なお、私学の問題も出ましたし、それから障害者の問題についての意見も出ました。けれども、詳しく論ずることができませんでした。また、「内申」の問題についてはもう少し深く考える必要があると思いますし、中退者の問題をどうするか、小・中学校では不登校の問題も深刻です。それから単位制高校や総合学科のことについても意見としては出たんですけれども、煮詰まりませんでした。

またリターンマッチというんでしょうか。一端選択した後に、また違うところを再選択できるのかどうかということまでは、ご意見としては出たんですけれども、討議に至りませんでした。

私としては、本当はまだこれから一時間ぐらいしゃべりたいんですけれども(笑)、もう時間がございませんし、皆さんを制止してばかりいましたので、今度は、自分を制止しなくてはなりません。いろいろな問題が残りましたけれども、行政の方々と現場の人々が認識と意見の食い違いはありながらも、同じ土俵に登って議論を始めたというところに、今回のシンポの意義を認めてよろしいのではないでしょうか。

今後もこのような議論を何回も繰り返してやりながら、行政と現場が協力して先程から繰り返しています「格差の是正」が少しでも進めば、21世紀の神奈川の高校に期待が持てます。そういう方向へ私どもとしては力を尽くすべきじゃないでしょうか。

コーディネーターの務めがうまく果たせませんでした。いろいろご不満の点があったかと思いますが、終わりに、本当のタイムリミットが来てしまいました。

またいずれ何らかの機会に、今日の総括を新聞紙上などに公表して、改めて皆さんにお知らせすることができればと思っています。

以上でございます。シンポジストの皆さん、会場の皆さんご協力を本当にありがとうございました。(拍手)

中　野：黒沢先生を初め4人のシンポジストの皆さん、どうもありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。(拍手)

今日の議論を聞きつつ、いつも頭の中にあるのは、神奈川県の財政状況は非常に厳しいというこ

とで、語られた中身は非常に壮大ですけれども、厳しい状況の中で、この時代を乗り越えていくために、私は教育行政がリーダーシップをとって、新しい何かを是非示して欲しいなという気持ちでいっぱいでございます。もちろん現場にいる私たちも頑張らなければいけませんけれども、まずはそういうところから１歩も、２歩も踏み出して頂ければという意味で、教育行政のお二方には是非エールを贈りたいと思います。頑張ってください。

それでは次第に従いまして、横浜市の教育文化研究所所長の小畑さんに、閉会の辞をお願い致します。

閉会の辞

小畑横浜市教育文化研究所長：ただいまご紹介を頂きました、横浜市の教育文化研究所所長の小畑です。

今日は、レジュメにありますように二つの団体の主催ということで、横浜でやるから、横浜市の教文研も共催しろというお話でございました。私どもは横浜市内に小・中、それから養護学校の皆さん、大体１万数千の方々を対象にしていろいろな仕事を行っているわけです。その分野の中で、教育相談の分野に最近高校中退の問題を保護者の方々がたくさん持って来られます。これは高等学校の方でもおやりになっているでしょうけれども、何でこんなに来るんだろうと思っていたんですが、先程から議論されていますような結果でこういう問題も出てくるわけです。

そんなことで、きょうはどんなお話になるのかなと思って、ここに座ってメモを使って全部書いていました。私が十分熟知しないこともお話になっていらっしゃいましたが、参考になるだろうと考え、私ども機関誌にも載せたいと思って書いていました。結論的に言って、メモを書いていて、そう簡単にいくような問題は一つもないんですね。今、神奈川県の高等学校の教育がこの方向でいけばうまくいく、進路指導もうまくいくのだろうか。現実に課題集中校などをつくったのは高等学校の責任ではなくて、これは考えたら、中学校側の進路指導に責任があるわけでしょう。そういうふうに過去何十年間もやってきたのです。私もその１人ですけれども、「あそこに行けばいい」とだんだん輪切りにしていっちゃう。だから、高校側の責任だと思っているようだけれども、私は中学校も責任をとるべきだと正直思いました。

これは稲垣さんと先ほど話していたのですけれども、こうなったらみんなガラガラポンで入れたらどうだろうか（笑）。本当ですよ。こんなに学校か余って生徒も減ってきてしまって、そしたらガラガラポンでやっちゃうのはどうか。もっと言えば、小学区制にして、その地域の学校に行くというふうにしたらどうか。昔そんな話をしたこともあるんですけれども、そうしてしまえば格差是正になります。中には、怒ってくる父兄もあるでしょう。大きなところはパラレルにしなきゃいけない。それは何もやれということではなくて、本当のことを言うとそうなるということです。こんな考え方も将来成り立つかもしれませんね。今後５年か10年の間に。そんな話をしてメモをとっていました。

何はともあれ地元横浜でご開催を頂き、又本当にたくさんの方々にご来場になって下さり、ありがとうございました。開催地として厚く御礼を申し上げたいと思います。

私は、２週間程前に横浜市美術館の所用で出かけていたアメリカから帰って参りましたが、そのときに通訳をやってくれた男がこういうことを言ったんです。これは参考になると思うんですが、日本では「夢」という言葉はどう解釈しているのかと聞くんです。金田一さんの字引を引いて、意味は現実の生活において起こり得ない睡眠中の意思の伝達だ（笑）。調べてこういうふうに書いて出した相手がマイケル・ジョーダンというバスケットのスーパースターですよ。年俸41億。彼がその通訳に「日本じゃどんな考え方をしているの」と。「眠った後だ。」「とんでもない。夢というのは実現するんだ。こういうふうに書き直すべきだ。」こう私に話したので、私もびっくりして、やっぱりドリームというのは必ず実現するんだということを知りました。今ちょうど我々がそういうドリーム、

夢を追おうとしている時だから、必ず実現するんだという気持ちで取り組みたいと思います。このマイケル・ジョーダンの話を最後にしまして、きょうの閉会の言葉と致します。

どうもありがとうございました。（拍手）

中　野：どうもありがとうございました。最後にすばらしい話を聞いてほっとしました。

それではこれで閉会と致します。（拍手）

総合学科、単位制導入も

新タイプの県立高校 10年計画で設置へ

2000年度から県教委

小森良治県教育長は十八日の県議会本会議で、普通科と専門学科の内容を併せ持った「総合学科」や新たな専門学科、単位制など新しいタイプの県立高校を二〇〇〇年度から十年計画で二十数校設置していく方針を明らかにした。榎並寛氏（自民、保土ケ谷区）の質問に答えた。

十年計画を前期五年、後期五年の二期に分けて設置していくもので、同教育長は地域バランスや高校の統廃合を踏まえながら、既存高校の再編、新設校の設置の両面で事業を進めていく考えを示した。

総合学科は、現在の十八学区に一校をめどに整備する方向。専門学科は、工業、農業など既存学科とは別に福祉や科学技術、国際など新たな時代ニーズにこたえる内容とし、地域バランスに配慮しながら設置。また、新たな単位制高校の新設も検討していく考えだ。

県教委は現在、教育ニーズの多様化や生徒数の減少を踏まえ、質と量の両面で県立高校の見直し作業を進めており、新しいタイプの高校の拡大は多様なニーズへの対応や進路選択の多様化の一環。

1999.2.19　神奈川新聞

県立高校 単位制など大幅増へ

2000年度から県教委が再編計画

県教委は18日、総合学科や単位制など新しいタイプの高校を2000年度以降10年間で計二十数校設置する計画を明らかにした。昨年9月の県立高校将来構想検討協議会（会長、平出彦仁・横浜国立大教育人間科学部長）の答申に基づくもので、今夏までに具体的な設置計画を策定する。

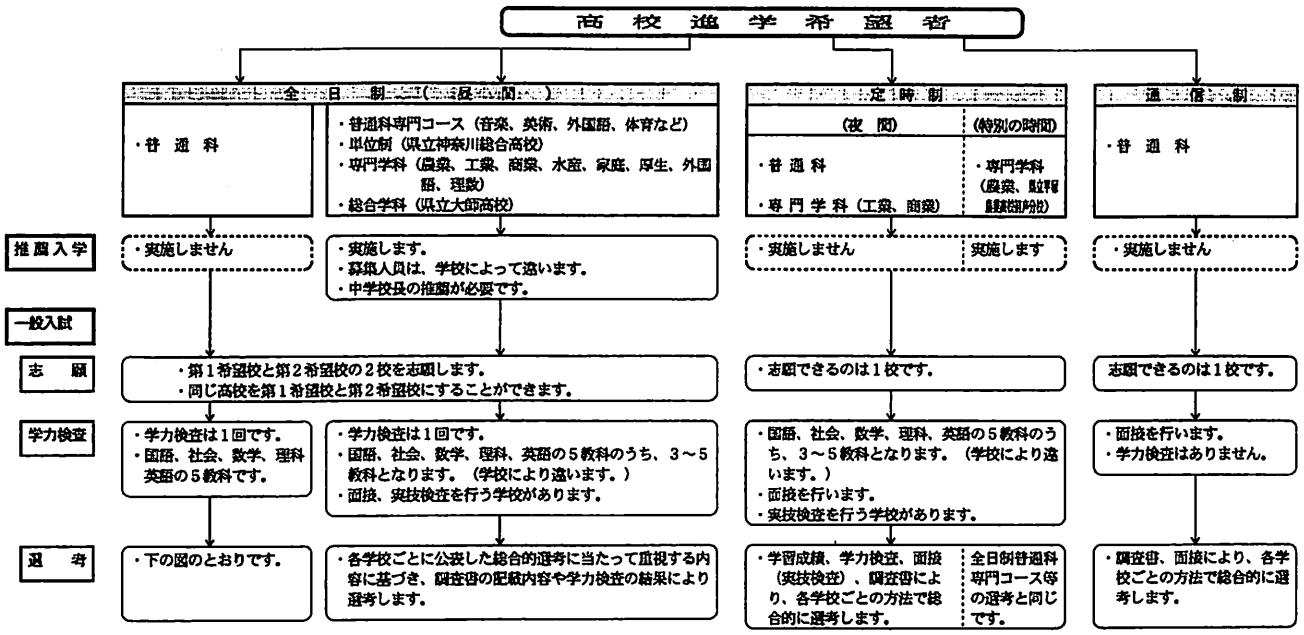
この日の県議会本会議代表質問で、榎並寛議員（自民）の質問に小森良治教育長が答弁した。県教委によると、新たに設置を計画する高校は、単位制普通科▽情報ビジネス系や環境系などの総合学科▽国際、福祉、総合技術など新たな専門学科、の3タイプ。「通学可能区域」を設置の単位とした答申を尊重し、ほぼ2学区を1区域として総合学科と単位制を各10校程度設置し、新たな専門学科も全県で数校整備する見通し。2000年度を初年度とする10年間を5年ずつ、前・後期に区切り整備するという。

県教委は既存校舎を活用する方針だが、これらの学科設置には、小集団教室や実習室など新たな施設のほか、建物の老朽化に伴い耐震補強工事なども必要となる。県教委は、財政負担軽減のため、国庫負担金の活用や校舎建て替えにリース方式も導入。再編整備に伴う高校跡地については、売却を含めた活用に向け、全庁的に検討するという。

【保泉　淳子】

1999.2.19　毎日新聞

資料１　神奈川県公立高等学校入学者選抜の概要



資料２　これからの県立高校のあり方について

～県立高校将来構想検討協議会答申の概要～

Ⅰ　県立高校の果たすべき役割

１　これまでの取組み

○　「高校百校新設計画」により、高校教育の機会を幅広く提供

○専門コース、単位制による普通科高校、総合学科などを設置し、特色ある高校づくりを推進

○　生徒自らの進路希望を生かせるよう、入学者選抜制度を改善

２　現状と課題

《社会の変化と生徒の多様化》

○　国際化、情報化、少子・高齢化等の進展、経済の低成長化傾向

○　生徒の個性や能力・適性、興味・関心、進路希望等が一層多様化

○　より良い教育環境を整えるとともに、様々な教育課題にもきめ細かく対応する必要

《少子化の中での県立高校のあり方》

○　公立中学校卒業者数は、平成18年頃がボトムと見られ、今後も学校の小規模化が進行

○　多様な教育活動の展開、学校の活力の維持といった観点から、望ましい学校規模について検討する必要

○　各高校の適正な規模を確保するため、全県的な視野から、県立高校の適正な配置について検討する必要

３　これからの果たすべき役割

○　県立高校に対する生徒や保護者の幅広い期待に応え、魅力ある高校教育を実現

○　今後も、意欲と希望をもつ子どもたちに、幅広く高校進学の機会を確保

○　特色ある高校づくりを一層推進し、多様で柔軟な高校教育を展開する必要

○　県立高校の規模・配置の適正化を図るとともに、教育条件の整備充実を一層推進

○　生涯学習社会の実現に向け、開かれた高校づくりを進めるとともに、学校週５日制の完全実施を視野に入れ、ゆとりを確保し、家庭・地域社会との連携を充実

Ⅱ　今後の高校教育に求められるもの

１　個が生きる教育

(1)　自ら学ぶ主体の育成

○　生徒が自分の個性を見出し、生き方を選択していくための「自分さがし」を的確に支援

○　自ら学び、自ら考え、主体的に行動する資質や能力を育てていくとともに、他者とも協調し、思いやる心など豊かな人間性を育成することが重要

(2)　主体的な選択に基づく学習

○　個性重視・人間性重視の学習への転換を図り、「一律に与えられる教育」から「主体的な選択に基づく学習」への転換が重要

○　生徒が学習内容や将来の進路を主体的に選択できる

ようガイダンス等の充実を図るとともに、学ぶ楽しさを実感できる魅力ある高校のあり方を考える必要

(3) さまざまな個性への着目

○ 異なる価値観や文化を受け入れ、個性の違いを認めあい、共に学ぶ姿勢の育成が重要

○ 「学(校)歴」ではなく、生涯にわたってどのような知識や技術を身につけ、豊かな人間性を養ってきたかという「学習歴」を重んじる価値観への転換

2 豊かな心（人間性）を育む教育

○ 生命を尊重する心や他者への思いやりを育て、豊かな心の育成を目指す「ふれあい教育」を進める中で、「ゆとり」ある教育活動を展開するとともに、自然体験やボランティア活動などを取り入れ、心の教育を充実

○ 健全な生活習慣の確立を図り、生涯にわたって健康な生活をおくるための基礎を育む教育を充実

3 望ましい社会性の育成

○ 学校では、ホームルーム活動や部活動などを通じて、多様な個性がふれあう中で、社会生活上のルールや基本的なモラルを身につけられるよう、望ましい人間関係を築く力や社会の一員としての自覚を育むための環境づくりを一層充実

○ 体験的な学習の場を地域に広げたり、地域の教育力を取り入れたりすることによって、地域の中でも望ましい社会性を育成

Ⅲ これからの県立高校のあり方

1 多様で柔軟な高校教育の展開

多様で柔軟な高校教育の展開を図るため、特色ある高校づくりを一層進め、個が生きる高校教育を豊かに実現

(1) 多様な教育の提供

ア 新しいタイプの高校の拡大

新しいタイプの高校は、従来の枠にとらわれない教育内容や柔軟な教育システムをもつ学校として、高校教育の改革の方向を示すパイロットスクールの役割を果たしている

(ｱ) 単位制による普通科高校の拡大

○ 単位制による普通科高校では、学年による教育課程の区分を設けず、多様な科目も開設するとともに、複数の時間帯での授業の実施や過去に修得した単位の加算ができるなどの特性を生かし、様々なねらいをもたせることが可能

○ 多様な学習希望、学習歴、生活スタイルに応じた教育が可能であるため、今後、全県的な視野に立って、積極的な設置の拡充が必要

○ 幅広い分野にわたる選択科目群を設置して総合的に学習できるようにしたり、特定の分野の選択科目群を設置して特色をもたせたり、あるいは、生活スタイルに応じたり、時間をかけて着実に学んだりすることができる柔軟な形態を取り入れるなど、多彩なあり方を考えていく必要

○ガイダンスの機能の充実や、適切な集団活動の機会の確保に留意

(ｲ) 総合学科の設置拡大

○ 総合学科は、普通科・専門学科に並ぶ第３の学科として、生徒が選択により普通教育と専門教育を総合的に学習でき、進路への自覚を深めさせる学習や生徒の個性を生かした主体的な学習を重視

○ 実践的・体験的な学習を通して、進路への自覚を深め、自ら学ぶ意欲を高めることが可能であり、今後、全県的な視野に立って、積極的な設置の拡充が必要

○ 系列の開設の仕方を工夫し、工学分野、ビジネス分野、国際分野など、特定の分野に重点を置くことによって、教育内容にそれぞれ特色をもたせた総合学科を拡充していく必要

○ 科目選択や進路に関するガイダンスを充実するとともに転入学についても配慮

(ｳ) 新たな専門学科の設置

○ 国際や科学技術、福祉などに関する新たな学科の設置を検討

○ 単位制による専門学科についても検討

イ 普通科高校の特色づくり

(ｱ) 多様な選択科目の開設と特色ある類型の設置

(ｲ) 生徒の学習希望や進路希望に対応した学校づくり

(ｳ) 普通科における専門コースの充実・改善

○ コースの内容と地域バランスに配慮して拡充を図るとともに、単位制による高校等の配置とのバランスも考慮し、今後のあり方を検討

ウ 専門高校の魅力づくり

(ｱ) 多様な選択科目の開設と特色ある類型の設置

(ｲ) 生徒の学習希望や進路希望に対応した学校づくり

○ 在学中の就業体験（インターンシップ）の実施を積極的に検討

(ｳ) 学科の統合や改編

○ 産業構造の動向や、地域と生徒の実態を踏まえ、学科の統合や改編を検討

エ 定時制課程・通信制課程の改善

(ｱ) 多様な選択科目の開設

(ｲ) 修業年限の弾力化

○ ４年間だけでなく、３年間でも卒業が可能になるよう、教育課程等を工夫

(ｳ) 諸制度の活用

○ 実務代替、大検合格科目の単位認定、技能連携などの活用

(ｴ) 単位制の活用

○ 多様な生活スタイルや学習希望に応じるため、単位制を活用

(2) 柔軟なシステムの実現

ア 選択中心の弾力的な教育課程の編成

○ 教育課程の一層の弾力化を図るとともに、個に応じた進路指導を充実する必要

○ 今後創設される「総合的な学習の時間」には、各学校の主体的な取組みが必要

イ 単位制の趣旨を生かした学年制の運用

○ 学年制の高校でも単位制を活用し、生徒の幅広いニーズに対応

ウ 個に応じた学習指導の充実

○ 小集団や習熟度別の学習指導を充実

○ 障害のある生徒などについて、今後も学習環境の整備に配慮していく必要

エ 自校以外での学習成果の単位認定

○ 学校間連携、高校以外での学習成果の単位認定、体験活動等の単位認定などを積極的に活用

オ 転入学・編入学の弾力化

○ 転入学の機会の拡大や、退学者の再入学制度の積極的な活用

カ 社会人の受入れ

○ 「科目履修生」として社会人の受入れを拡充

(3) 中高一貫教育について

これからの中等教育全体のあり方を展望する中で、中高一貫教育についての研究成果などを踏まえ、中高一貫教育のモデル校の設置等も含め、取組みを進める必要

2 生徒数の動向を展望した適正規模と適正配置

各高校の適正な規模の確保と特色ある高校の適正な配置を

図るため、再編成・統廃合等を含めた再編整備を検討

なお、再編成・統廃合等の検討にあたっては、高校への進学希望に応えられるよう、進学機会の一層の拡大に努める必要

(1) 生徒数の動向

○ 平成19年頃がボトムと予測される生徒数を視野に入れた検討が必要

(2) 高校の適正規模

○ 多様な教育活動を展開でき、学校行事、部活動、生徒間の交流など、多様な個性のふれあいの場を保障できる学校規模の確保が必要

○ 小規模化による学校の活力低下や、教員配置数の減による教育活動、校務分掌等への影響を考慮し、一定の学校規模の確保が必要

ア 学級定員

○ 当面1学級40人とするが、ゆとりある教育を行う観点から、国の動向を踏まえ、将来的には、学級定員の段階的な縮小を期待

○ 小集団や習熟度別の指導など、多様な学習集団による弾力的な授業展開が必要

イ 学校規模

○ 学級定員の観点だけではなく、学校全体の生徒数を検討する必要

○ 当面1学級40人を算定基礎として、学校全体で18学級（720人）から24学級（960人）を標準とし、専門学科や学区の事情によっては、18学級以下も想定

ウ 計画進学率

全日制高校への進学希望等を勘案し、計画進学率を段階的に引き上げる必要

(3) 特色を生かした適正配置

○ 立地条件等に配慮し、良好な教育環境を確保する観点から、再編成・統廃合等の再編整備を実施する必要

○ 再編整備にあたっては、全県または地域のバランスに配慮し、特色ある高校を配置

ア 単位制による普通科高校への再編整備

既設の普通科高校の発展的統合や改編により、通学可能な範囲に設置

イ 総合学科への再編整備

既設の普通科高校や専門高校の発展的統合や改編により、通学可能な範囲に設置

なお、将来的には、各学区に設置することを期待

ウ 専門高校の再編整備

新たな専門学科の設置や総合学科への改編など、再編成・統廃合等の再編整備を含め、今後のあり方について検討する必要

エ 普通科専門コースの配置

内容や地域ごとの校数等を考慮して設置

オ 学校間連携を考慮した再編整備

学校間連携を視野に入れた再編整備を検討

(4) 再配置を踏まえた施設設備の整備

○ 特色ある高校の配置にあたっては、施設整備の整備に十分な配慮が必要

○ 校舎等の老朽化、耐震対策の有無なども考慮し、再編整備の際に所要の改築・改修及び設備整備の実施が必要

○ 障害のある生徒に関して、施設設備面の整備についても一層配慮していく必要

(5) 将来の学校施設の活用

○ 統廃合等を行った場合の学校施設は、学校教育以外の用途への転換も含め、県民ニーズを踏まえた活用や地域に役立つような活用を検討

3 地域や社会に「開かれた高校」

地域・社会との相互交流を進め、地域の教育力を生かすことや、施設の開放、学習機会の提供を一層推進することが必要

(1) 学校教育活動における地域・社会との連携・交流

ア 中学校・保護者、中学校等との連携

○ 高校からの情報発信の活発化や中学校との連携の推進

イ 地域、大学、企業等との連携・交流

○ ボランティア活動等による地域との交流の活性化

○ 企業での体験学習やインターンシップ、大学等の授業への参加などの機会を拡大

ウ 地域・社会の教育力の活用

○ 社会人講師の活用を拡大

(2) 学校の機能・施設の提供

○ 学習施設・体育施設の開放や各種の講座等の実施を一層推進

○ 余裕教室は、特色づくりのための施設や災害用備蓄倉庫等で活用

○ 今後、生涯学習、福祉、防災など多目的な活用について検討する必要

(3) 開かれた高校づくりを促進する仕組みづくり

○ 学校を活性化するため、家庭や地域住民の意見等を取り入れる仕組みづくりを検討

○ 高校教育について意見を聞く「学校モニター」のような制度を検討

Ⅳ 将来構想の推進にあたって

1 学校に期待するもの

○ 県立高校の多様化や特色づくりの推進にあたっては、各学校の主体的な取組みが重要

○ 生徒や保護者、県民から信頼を受けるような学校運営のあり方を検討する必要

○ 「開かれた高校」づくりに対する積極的な取組みを期待

○ 教職員自らの意識改革と学校改革への積極的な取組みを期待

2 行政に期待するもの

(1) 特色ある高校づくり等への支援

○ 特色づくりを進め、改革に取り組む各学校を支援する必要

○ 教育課題が多く見られる高校に、今後も条件整備を進めていく必要

(2) 中長期的な展望に立った改築・改修を含めた施設設備

○ 老朽化や耐震診断に伴う改築・改修は、統廃合等との関連に留意しながら、計画的に整備を推進する必要

(3) 他の高校設置者との連携

○ 県立・市立・私立高校の間の連携・協調を一層推進

(4) 教職員の資質向上

○ 民間企業等への派遣体験研修など研修の充実や、新規採用教員の計画的確保が必要

○ 教職員が主体的な取組みにより幅広い視野を養うことができるよう、支援や働きかけが必要

3 家庭・地域・社会に期待するもの

(1) 保護者・県民の理解と協力

(2) 学習歴が適切に評価される社会への転換

○ 大学入試や企業の採用方法の改善の必要性

○ 数値や成績を過度に重視する意識を転換し、子どもたちの学ぶことに対する希望や意欲を大切にする教育を重視すること

シンポジウムアンケート用紙

1998年11月7日(土)

本日は、お忙しい中ご参加いただき、誠にありがとうございました。お手数ですが、シンポジウムに参加してのご感想などをお聞かせ下さい。また、今後のシンポジウムに対するご要望等がありましたらお知らせ下さい。

Q1　本日のシンポジウムの論議をお聞きになっていかがでしたか。いずれか一つに○を付けて下さい。
①　参考になった。　②　物足りなかった。　③少し疑問が残った。
④　その他（　　）

Q2　本日のシンポジウムのテーマの一つは高校入試でしたが、高校入試についてどのようにお考えですか。ご自由にお書き下さい。（記入欄が不足の場合は、裏にお書き下さい。）

Q3　本日のシンポジウムのもう一つのテーマは、21世紀へ向けた神奈川の高校改革でしたが、以下の項目の中でどのような高校のあり方を期待されますか。3つまでお選び下さい。（　）に○を付けて下さい。
（　）①　生徒の多様な選択が保障されるような高校教育
（　）②　専門性を重視した職業高校やコースなどが充実した高校教育
（　）③　綜合学科や単位制高校の増設
（　）④　公立の中高一貫校の設置
（　）⑤　生徒の自主性を尊重する高校教育
（　）⑥　生徒のしつけやマナーなどをしっかり指導する高校教育
（　）⑦　大学受験など進学に対応した高校教育
（　）⑧　高校入試制度を廃止してすべての中学生に開かれた高校教育
（　）⑨　施設や設備の充実
（　）⑩　学級定員（現在40人）の減少
（　）⑪　教職員の資質の向上
（　）⑫　公立高校の統廃合
★具体的なご意見などがありましたら、ご自由にお書き下さい。

Q4　今後のシンポジウムの参考にさせていただきますので、シンポジウムへのご意見、ご要望がありましたら、ご自由にお書き下さい。

■お差し支えなければ、お名前と所属（職業など）をお書き下さい。
お名前〔　　〕　所　属（職業など）〔　　〕

◆ご協力ありがとうございました。

質問紙番号		サンプル数	
Q1		Q1	
1	参考になった	1 参考になった	19
2	物足りなかった	2 物足りなかった	13
3	少し疑問が残った	3 少し疑問が残った	14
4	その他（自由回答）	4 その他（自由回答）	5
9	無回答	9 無回答	1
		計	52
Q3①～⑫		Q3①～⑫	
選択されていれば　1、いなければ　0		1 多様な選択の保障	25
		2 専門性重視の職業高校	7
		3 綜合学科や単位制高校	13
		4 中高一貫校	6
		5 自主性の尊重	17
		6 しつけやマナー	7
		7 大学受験	1
		8 高校入試の廃止	21
		9 施設や設備	10
		10 学級定員減	27
		11 教職員の資質向上	7
		12 公立高校の統廃合	3
		計	144
JOB		JOB	
1	小学校教員	1 小学校教員	1
2	中学校教員	2 中学校教員	13
3	高等学校教員	3 高等学校教員	12
4	教員（所属不明）	4 教員（所属不明）	3
5	教員OB	5 教員OB	1
6	その他教育関係者（塾など）	6 その他教育関係者（塾など）	4
7	一般市民	7 一般市民	4
9	無回答	9 無回答	14
		計	52

Ｑ１　その他

・立場が違うと考え方がずいぶん違うことが分かった。

・参考にはなりましたが、議論の場が増えると良いと思います。

・Ｓ氏のアンケート分析は甘い！県民理解は得られてなどいない。

・楽しみにしていたのだが学校を出られず大幅遅刻した。申しわけない。

・先生スタンダードの枠を出ることが出来なかった。

・何か、禅問答を聞かされていた気になりました。現場のリアルな疑問・批判に対して、それを煙にまくような県教委の答弁。

Ｑ２　高校入試について

1　全入は難しいのでは？

2　今回の入試では、「行きたい学校へ」とか「学校間格差をなくして」とか言うが、このやり方では絶対にそれとは逆の方向に進んでしまっていると思います。この入試がはじまる前に県教委が言っていた「特色づくり」でさえ、今の内容とはちがうと思います。

3　入試改革（現行）は、中高の学校現場、生徒の双方にとってマイナスであったのではないか？

4　本気で格差をなくすつもりなら抽選または全入にすべき。一方で到達度が様々な生徒を入れて高校教育は成り立つのか？と不安がある。選抜するなら入試のみでよいと思う。

5　行きたくない生徒、受からないと思って受験している生徒が高校へ行ける現在のような全入の様な形は、良くない。あまり良くないと思われる学校の生徒がしている格好や姿形、バイクにタバコに食い散らかし。もっと彼らの向いている方向があると思います。学校が人生のすべてではない。

6　入試を行なうということは、選抜をするということであり、当然、選抜されない生徒も出てくる。それはやむを得ないことではないか。定員があり、選抜をする以上、そのリスクはついてまわる。現在は、そのリスクに目を向けすぎで、むしろ必要なことは、選抜された生徒が胸を張って学習できる社会的雰囲気の環境づくりではなかろうか。

7　人間を区別する入試には、全員が満足する方法はない。全入が望ましいのではないかと思う。

8　個性尊重の教育を求めての高校入試改革であったとしても、現在の中学生の実像を考えたとき、中学生に“自分”を捉える力があるとは考えにくい。彼らに“選択は自分で決めなさい”と指導したとしても、彼らは自分の成績を主材料として合格できるであろう高校を選択するにすぎない。総合学科そのものの校数の少なさを考えたとき、県は“選択の自由”を論じながらも、結果として、特徴のない学校から選ぶことを強いているにすぎない。各高等学校がそれぞれ自分の学校はこんな特徴があると、今年あたり宣伝しているが、どれも似たり寄ったりで、教師の目でみてすら識別がむずかしい。まして中学生本人に、それは分からない。また、識別して選択しようとする生徒はほんの一握りの生徒しかいないのが現実であろう。したがいまして、高校改革と入試制度、ならびに中学生の質的向上の将来像をしっかり理念化していかなければならないと考える。

9　中学校の進路指導では、発達段階に応じて、職業を知る（1年）、さらにその職業を体験し、自分の適性を知る（2年）、と計画を立て進路学習を進めているが、3年になると進路決定へ向けて受験指導一辺倒になっているのが現状である。将来的には、自分の夢を述べさせる作文で高校入試に変えてもいいとかなと思う。

10　入るだけでなく、3年間生活することを生徒たちに理解させるのが年々難しくなっている。ニーズにこたえ単位制高校をふやしていくことが、中途退学者を少なくする一方法であるようにも思う。県西学区にも早期に導入するよう希望する。

11　あるべき方向について、理念的には一定の理解は出来るが、中学校の実体、課題をかかえ解決に努力されている高校の先生方の思いを、行政サイドがどれだけ把握しているか大いに疑問。そこから実体論で討論をしたい。

12　基本的には希望者全入の立場ですが、中学校の現場は厳しい。2学期ともなると「入試があるから」、この言葉が問題をもった生徒への歯止めとなっているのも事実。こういった現実をどう考えるか。まだまだ荒れている学校は多いのです。
　相対評価については、県独自の判断のはずだが、ここらへんに解決策はないか。他県の例もしっかり分析してほしい。神奈川の5段階の％は、全国でも厳しい。がんばっても「1」という生徒は、どうしても中学校3年間はつらいものになっている。本当に、「1」「2」の生徒を救ってあげられる教育制度が可能であればよい。中学校、高校の多くの問題を解決するのは、これしかないとも思う。

13　私が受験した時は、3年の1月におこなわれたア・テストと入試で合否が決まったようです。その後、受験勉強が少しでもゆるやかになるようにと、神奈川方式が採用されました。今また、その欠点を是正する意味から、新しい入試制度になりました。導入前の予想と導入後のギャップをどう埋めるかが大事なことだと思います。

14　受験生を持つ保護者です。入試については全く分かりません。学校の説明会でも、学校も分からない様子です。行ける学校より行きたい学校へは、本当にありがたいとは思いますが、実際は行ける学校です。本人の学力で決められるしかないのです。我が家にも子供達が来ます。本人の行きたい学校には行かれません。又、推薦も、本人が行きたくて行くのではなく楽をしたい為、受験より先に決めて…という子供達が今は多いように思います。保護者も地域も大人も、学力社会がまだ残っているので、ここから変わらなくてはと思います。

15　入試を全入（公立）にしてしまうことに賛成です。公教育の役割は、より小さくしてしまうことが良いと思います。

16　（後半は聞いていないので）それぞれの立場からの話で、制度をつくる時の理想と現実のギャップはなかなかうまらないものであり、制度をつくる側は、もっと柔軟な対応ができるようなものをつくらないといけないのではないかと思った。根本には、高校教育や入試に対する考え方の違いもあると思うけど。

17　試験という従来の方法でなくても、子どもたちがその高校に「入学した」旨の表現は必要と感じます。また、希望する子どもがほとんど、何らかの特別な理由がない限り入れるよ

うになったらよいと感じます。子どもがもっと主体性をもつべきと感じました。高校受験をしたい子どもたちは、何を考え、どうしたいと感じているのでしょうか。

18　親だけではなく、中学教員も意識が変わっていない。だから学力以外の柱を、中学校側が学校生活の中で生かせないでいる。特に、中学の課題集中校では。

19　点数による選抜である限り、行きたいけど行けないから、行ける学校を受ける、推薦してもらうという形が残る。しかし全入にすると、義務教育期間が長くなるだけのようにも思える。

20　入試はなくした方が良い。しかしこれでは学校間格差がなくなるとは思えない。完全になくしていくための第一の点は、格差を生んだ原因がどこにあったのかという、行政・教師・県民の徹底的な批判なくしては、将来構想の文のように言葉が踊っているだけで、高校は決して変わっていかないと思う。更に質問の中からも見えたように、学校の問題、特に苦しんでいる学校の実態を率直に話し合い、公表し、その原因を取り除いていく共同追求がなされる必要がある。難しい構造が生きていく一つの重要な条件であると思う。

21　中学校の教員という立場では、新制度は、入試で点数のとれない、かつ特徴のない生徒が切り落とされているろいう感想を持っています。以前の制度では合格できていた生徒も第二希望に回され、更に不合格という結果がふえていると思われます。中途退学者の増加は第二希望校に進学した生徒がいる結果です。今までは一校不合格であれば私立の併願校に進学していた者が、奥山先生がおっしゃった「機会の増加」により「行きたくなかったのに行くことになった」生徒も増えたのです。

22　格差是正ということがよく言われますが、こえはまったく現実的ではないと思われます。まず格差が生じるのは当たり前だという前提にたって、では、その格差に応じて高校側がどのように対応していくのかが問題になるはずです。その高校に本当は入りたくなかった生徒が多いのならば、入ってよかったと思い直させるような高校になるように、生徒の要求に応えていくべきではないでしょうか。したがって、入試が注目されるのは、ある種、高校の中味が貧弱なことの現われではないかと思います。

23　高等学校の特色が見えてこない。生徒が自己選択するための材料が不足している。もっとわかりやすい、魅力ある特色、“まなびたい”と思えるような特色を打ち出していかなければ、単なる制度転換に終わると考えます。制度については、過渡的なものとうけとめています。

24　複数志願制については、子どもたちの選択幅をかえってせばめていると思います。幅がひろがったのは、いわゆる“学力”の高いといわれる一部の子どもたちだけではないでしょうか。普通科への推薦制度導入については、普通科志願者全員が希望した場合、中学校現場としては全員を推薦することになります。そうした場合、現在の入試日程では中学校の教育課程は極めて困難な状況に追い込まれます。神奈川の入試改革は、ほんとうに子どもの立場にたったものだったのでしょうか。

25　入試を変えて高校の中味がどうなるというテーマ自体がおかしい。前回のカリキュラム再編の時に、標準単位におおきく不足して設定した講座は認めないことや、新しく講座を作ろうとしても講座名の変更を求めてきたりと、カリキュラムに様々な制限をつけておいて、ここにきて多様な生徒を受けいれるように入試を変えられても、カリキュラムは全部の教科を履修しなければ卒業できない状況がある。

まずカリキュラム編成が自由に決められるようになって、その次に入試改革があるのではないか。現在の状況は順序が逆になっている。

最近の新聞に入試から学力テストをなくすこともできるといった内容の記事があったが、これも実技課目などだけでも卒業できるように変える方が先ではないか。

今の高校の問題は、あまりに多くの役割をあたえられている所にある。今回の改革の流れは、高校が学力中心を捨てて、青年期の生活の場であると、社会にうったえる所にあると思う。その前提でカリキュラムを変え、入試を変えていくべきではないのか。

「高校はどう変わる？」の題は「社会はどう変わる？」でもあり、高校が変わろうとしても社会が抵抗する場合もある。親や子供が従来どおりの学歴重視の考えをもつかぎり、改革しようとした学校は世間から低い評価をうけることにもなる。(今回のシンポジウムは入試に限定したもので、ものたりないものでした。)

26　県や国が入試制度そのものをどう考えるのか？　理想はわかります。しかし現実はどうですか？　選抜制度？　でも試験は一回ですね。社会のニーズはどうですか？　資格は必要に応じて、試験に合格することで取得できればいいんじゃないですか？　高校卒、大学卒に意味を持たせすぎていませんか？　学校（高校・大学）へ行かなくとも、社会で胸をはって生きていける社会構造が必要ですよね。高校以上の学校は「自ら学びたい人」のためにあるべきものだと思います。だから一人ひとりが選択できるのではないですか？河村さん・石田さんの現場のとらえ方や質問されている方々と、「奥山さん」「鈴木さん」のとらえ方にあまりにも差があることがよくわかりました。現場の人たち（先生方）は大変ですね。机にすわって理想ばかりいっている人はいいですね、楽天的で…。

27　来春には間に合わないが、再来年（2000年）の春から、高校入試で学力検査をすべての高校で廃止する。小学区制を導入し地元の小中から高校へという通学区を制限。高校間格差をなくす唯一の方法だと思う。高校全入にすべき。新制度の入試はあまりにも不透明で反対。「作文と面接」でもいろいろ問題がある。新制度の入試は今春限りにすべき。

中学校の先生の意見で出た「入試の内実がわからない」に納得、首肯します。総合的選抜はかなりいいかげんにやってます、高校では。したがって評価基準が中学ではわかりにくいのも当然。

総合的選抜で重視する中で、おかしなものもある。「中学で運動部を３年間続けたもの」にAランクをつける。では、２年間（２・３年）では不利なのか。こうしたものをもっと明瞭化する必要があるのではないか。

28　高校入試時点までに、子ども一人ひとりが自分が何にむいているか、何をやっていきたいのか、希望を持てる子どもはわずかではないでしょうか。入試は人生の通過点であると思います。現実は偏差値で輪切りにされていると感じます。学校の授業の学習だけでは入試に不安がありました。（塾の点数のデータには驚きました。）

29　“行ける学校から行きたい学校へ”のスローガンのもと、始まった新制度であるが、そのスローガンに空しさを感じさせられる現実があります。生徒。保護者の意識改革も必要なのでしょうが、選抜制度だけを変えるのではなく、その後の高校のあり方、その後の進路のあり方と大きく関わっている

問題だと思います。

30　全入制にしたらどうか？

31　いずれにしろ入れない生徒の総数が変わるわけではない。とすれば、入試はできるだけ単純な方がよいと思う。内申は廃止しよう。

32　入試が変わって、高校がゆれ、中３の子どもたちに不明確な道しか示せないとしたら、迷いつづけていくことになるのではないか。一方、高校も生徒の変化のスピードに追いつけず、置き去りにされ、生徒がいなくなってしまうのではないか。子どもを見すえながら、制度をこえて、10代の居場所を考えましょう。

33　県の役人と現場の教員は、やっぱり意見がくいちがって、おかしかった。あたりまえといえばあたりまえだが。

34　まず動いたことは評価したい。しかしより良いものをめざし、研鑽したいものです。人が人として生きる為に。

35　今後、県教委は具体的にどういう方向で修正をしたり、この入試制度を改めていくのでしょうか。行政の姿勢がよくみえません。また、神奈川県の組合はどのように、これに対してお考えなのでしょうか。よくみえてきません。（スイマセン）

36　中学の進路（学）指導の輪切そのものである。

37　普通科への推薦制度の導入には反対です。県教委の方（鈴木さん）の発言では、改正大綱での検討事項とされ、首都圏では神奈川のみ未実施だから、やる方向ですすめているとありましたが、「お役人らしい」発想の典型のように聞こえました。実施している県の中高の現場・生徒の苦しんでいる実態に目を向けないのでしょうか。

38　何のために入試改革をするのか？　子供のためによい高校をつくるのなら、もっと、今は高校の条件整備に力を入れるべきである。

39　理想と現実の差はなかなか埋まらないが、将来を担う子ども達に、生きる意欲と社会への責任を持たせることを考えると、もっと教育界全体に物質的なゆとりが必要だと思う。

40　何をやっても同じでは？　根本的に高校教育を変える必要があるのでは。生徒が学びたいものを、自分で調べたり、質問に教師の所へ行く形。

41　課題集中校の問題も重視してほしい。新しい入試方法が、今までの方法と切り離された形で、突然導入されたこともあって、吟味が不十分である。

42　子どもが主役の行政と入試が足りていない。

43　希望者の多い学校に受験生が集まるのは当然のこと。選抜という行為が行なわれるのは必然である。学校間（学力間）格差があるのは、ごく当たり前のことであり、より高い知識を要求する者に対して、高い知識を提供するのは当然の義務である。選抜に使う道具として人間の能力差を競うのであれば、やはりその客観性および努力との比例性からいって、やはり頭脳であろう。よって、今までの受験体制を大きく変える必要はない（試験の内容は別にして）。やはり努力する人間が報われるべきである。これが大前提である！
　そして言いたい！　今の世の中は努力をはかる機会が18、19才あたりで終わってしまうという事実もしくは考えが大勢をしめていることが問題なのである。子供たちは短期決戦を強いられていて、人生の１／３もしくは１／４のみの努力だけで、その人間の価値が決定されるという恐怖を感じている。それがひずみを生むのである。努力したい時いつでもでき、そして、いつでも評価を得られる。…そんな世の中にすべきである。では、そんな世の中にするために高校にできることは…？　と考えて、特色を（学力だけでない）全面に出すのであれば、私は賛成する。しかし、高校もしくは中学だけの自己満足に終わるのであれば無意味なことに終わるだろう。

Ｑ３　高校のあり方について

1　多様な…というが、現実に何十年も子供たちを見てきて、自分の進路の面で中学卒業時点から何も考えずに変えないということ自体がおかしいと思います。

2　高校全入に関する議論を深めていってほしい。

3　学習意欲をあまりにも感じない生徒が多い高校は必要ない。高校進学は学習意欲があることが大前提。学習意欲がない生徒についてどう考えていくのかは、社会の問題である。それが教育現場の問題であるとするならば、それは学力偏重の考えにつながっていく。勉強が嫌いな人がいたって良いではないか。

4　生徒が自分の適性に合わせて学校を決めていくためには、高校側の「特色」はやはり大きな決めてとなる。現実に義務教育化に近づいている高校進学率、何とか希望者全入につながる方法を考えたい。

5　小学区制の中で、個々の高校を考えるのではなく、基礎課程は各校で行ない、コース別については地域内で相互に行き来のできるカリキュラム編成にしてはどうか？

6　アメリカの大学や亜細亜大学でも採用されている一芸による合格制度など、一考の価値があるかと思います。（討論にもあった。入ってから出るまでの、その生徒の能力を生かせるシステムが必要ですが。）

7　高校の特色づくりを高校個別に考えさせる形式では、本当の特色づくりはすすまないのでは？
　格差の問題は、機会平等だが結果不平等であることを前提に考えたときに、その方向性については、システムを考えていく場がまだ必要。

8　これからの高校は、生徒の多様な選択が保障されるような器が必要だと思います。その器が入学した高校になければ、器を持っている高校に行き授業を受けさせればよいのではないか。つまり、単一高校内だけで85単位をこなすのではなく、いくつかの高校と連携して総合学科や単位制学科に対応させてはいかがでしょうか。そうすれば学校格差も少しは解消されると思うのですが。Ａ高校卒業、Ｂ高校卒業ではなく、高等学校卒業という形に変えてはいかがでしょうか。

9　学級定員の減少をまず優先すべきである。

10　高校は、義務ではないが、希望全入に。義務ではない教育がそのまま社会での仕事と、あるいは大学へ、スムーズなつながりになるとよい。

11　中学校で荒れる生徒のほとんどが、学習面でのつまづきや劣等感を持っています。相対評価のため、いくらがんばっても、なかなか評定の数字は変わらないのです。小学校からの学習が定着していない生徒が、中学校の勉強を強いられている苦しさ、相当のものと思います。中学校から入試のための勉強だけでなく、生徒一人ひとりに合った学習を、６年という長いスパンで考えて頂きたい。

12　生徒が教師を選べる制度の導入を早急に検討すべきだと思います。なぜ、入試で学校を選べるのに、教師を選ぶことはできないのでしょうか。

13　個性を尊重する教育をしていくのに、どうして美術や音楽を減らしていくのか。結局、学力ばかりを尊重しているのではないか。

14　“多様な教育”を提供するというのであれば、その前提として“希望者全入”“すべての中学生に開かれた高校教育”があるのではないのでしょうか。また、“多様な教育の提供”のための予算的構造（人的構造も含めて）も必要です。どうも県教委の考えは、“はじめに統廃合ありき”で、“教育の中味”については、とってつけた感が否めないです。

15　公立高校の制服廃止。現在の制服をどう考えるか。高校生の服装があまりにもひどすぎる。制服制自体にも疑問がある現代、ほぼ容認状態の服装指導は周囲に不快感を与えているだけで、マイナス面しか考えられない。

16
・職業高校について：某農業高校では卒業生の90％以上が普通科卒と同じ進路。どう考えたらいいのか。
・綜合学科や単位制高校の増設：急務である。しかも多数必要。そのために統廃合を大胆に改革。
・公立の中間一貫校の設置：実施するなら一気に多くの中間一貫校に。（徐々に増やす方式ではダメ）
・大学受験など進学に対応した高校教育：必要なし。勉強する子は、ほっておいても自分で学ぶ。
・30人学級の早期実現、公立高校の統廃合が急務である。単位制１校、綜合学科１校、なぜもっと沢山つくらないのか。一県民として怒りがこみあげてくる。
・毎日、勉強する意欲のない生徒と接して、彼らが可愛そうに思える。高校に進学はしたが、魅力ある科目（授業）がないからだと実感、反省している。まさに「多様な選択」（科目）が、今、現在必要なのだと思う。
・小学区制にし、「くじ引き」で入学する高校を決めれば良い。格差是正の一方法。
・「個が生きる教育」で奥山氏が語られたことは理想論中心で、現状に無知？　綜合学科を否定した研究校を容認したり、綜合学科に移行したいという高校にストップをかけているのが現状です。一刻も早く「個が生きる教育」を実現したいなら、来春にも30校を統廃合し（県は金がないのでしょう）、高知を売却すべきです。

　県立高校に特色はあるのでしょうか。私はないと思っています。私は県立に勤めていますが、自分の子供は私学に送るつもりです。建学の精神・教育方針が、私学の方がはっきりしている。

　中学方の進路は「高校進学」しか道がないのが、今の日本社会の現状です勉強したくないのに「高校進学」です。ここが改革のスタートです。中学生にもっとゆったりと勉強させたいというのが願望。

　繰り返して書きたいが、「単位制高校・総合学科を設置し」などと「これまでの取り組み」にあったが、もっと多く（県立高校の半数）を、こうした学科・高校にした場合、「設置し」とうたってもようが、たった一校ではないか。

　中学の相対評価に対して疑問が投げかけられたが、私も同感である。私の高校は全県一区ですので、中学からの評定の中味に、地区によって高低があります。具体的に言うと、A中の(3)とＢ中の(5)が、同じ入試得点であるという例もある。高校間格差もあるが、それ以前に中学校間でも差があるのです。

17　何年後を目安に高校教育が変わるのでしょうか。（新入試で入学しても高校は変わっていない様に思われます。）　社会の受け入れ（職業選択）を考えると不安があります。今の生徒達を大切に見守ることも必要ではないでしょうか。

18　無試験、全入制度という形には疑問をもつが、多様な生徒の受け入れができるシステムを作ってもらいたい。そういった意味では、総合学科　専門学科の充実を図ってもらいたい。

19　希望者全入制度を、是非、実施してほしい。

20　入りたい者はとりあえず入学する。希望する者の多い学校は５０人１クラスでも仕方ない。単位の修得は厳しくする。合わないと思ったら転学しやすくする。学校間格差は、ある程度やむをえない。

21　小中高の教育現場（学校）に、ＰＬ法の適用をご検討ください。

22　生徒の変化に対応する高校づくりは、入試を変えてもかわらないようだ。これに関しては、高校そのものを疑うことからはじめるしかないのではないだろうか。学校に求められるものについて、もし何もないとしたら、彼らの求めるものはどこにあるのか。毎日、砂漠の中に水をたらしているような気がしています。

23　何はなくても、学級定員の減少です。

24　こういう高校ありき…ｗ用意する努力の中に自分ありきの“人”が育つのではないでしょうか。教師はゆったりと行事を見つめ直し、輪切り作業をしない状況になる成熟した社会をめざしたい。地域で人として生きます。

25　私は総合的選抜がうまくいっているとは思いません。入試による学力一本でよろしいのではないでしょうか。また学科についても、青年期の若者が専門学科を選べるとは思えません。今までの単なる普通科の中で、子どもが自分の道をさぐっていければいいのではないかと思います。

26　（生徒の多様な選択が保障されるような高校教育）に期待したいが、中学の生徒の個性がどれだけあるか、わからない。

27　教員の方も、生徒と同様に人数を減らされて苦労しています。ゆっくり考える時間がほしいです。

28　おちついて生活できる高校ならば、偏差値など関係ない。そこをえらぶ中学生は必ずいるはずだ。

29　多様な社会問題が次々と報道される中、子ども達は自然と社会に対して逃避したり、表面上の安定を求めていく。学力偏重の現実を打ち崩さないかぎり、社会の中で自分の生きる道を見つける保障はない。（時間がない、教えられない）学校で学ぶべきことはたくさん残っている。

30　卒業を難しくする。（入りやすく出にくい形）　いつでも入れて、いつでも卒業させる。又は、希望者全員に卒業資格を

与えよ。内容は問わない。→社会が必然的に変わる。

31　進路保障はいいことばですが、これのみではまずいと思っています。

32　教育現場のみではなく、家庭も参加させる教育。99年より、新生児へは従来の母子手帳と共に家庭教育帳が配られます。小、中学における子供自らの自己決定（段階的）の練習が、今後、上へ行って役立つと思います。

Q４　シンポジウムについて

1　あんな、あじるような意見を言うのをみてると、組合って何？　と思わないわけでもありません。去年のほうがおもしろかったです。

2　いろいろやって下さい。

3　今後も続けて下さい。中高の教員が一堂に集まって議論することの意義は大きい。

4　入試の問題については、現場からは改悪としか言いようがないが、そのことと、高校のあり方を変えることは切り離して、もっと議論を深めてほしかった。

5　公立高校が主ですが、高校について　or　教育について考える場としては、より広く、私学・塾等、より多く参画できる場であっていただきたいと思います。その意味で、ご案内、ありがとうございました。

6　ムダな言葉が多い。アンケートの内容をくり返すしかしない鈴木氏は、出席の意味ない。奥山氏は現実が見えないようなので、学校回りをして欲しい。

7　もっと問題をしぼって、行政とともに続けてほしい。本日の中で提起された問題の中から選出して、来年もつづけてつきつめてほしい。

8　高校の先生方の大変な現状（各校の特徴づくり、希望せず入学した生徒への対応等）がよくわかりました。課題集中校に勤務されている先生方の御苦労は並大抵ではないのですね。こういったシンポジウムを、自分がつとめている中学校のある学区の高校の先生方と共に開催していただければと思いました。

9　どれも大事な質問なのに、時間がないからと言って、あいまいにしている。たくさん質問を受けて、都合の良いところだけ、かいつまんで答えるのはおかしい。ひとつひとつ質問を受けて、答えるべき。

10　色々な立場での発言があり、たのしかったです。願わくば、この意見が少しでも行政に反映することをのぞんでいます。

11　マイクの整備をきちんとお願いします。

12　放送の状態（ハウリングが耳ざわり）。高校現場の先生方のご意見が伺えてよかった。

13　県立高校で最近、差別事件が多発しているようです。ご存じですか。

14　教文研との合同の形は、様々模索してください。高校としてのシンポも大事だと思います。バランスをとりながらでいいですが。行政も開かれていくことを望みます。

15　教育ってなーに、教育の原点ってなーに、の論議をしたい。そこから新入選の是非等が出てくる気がします。

良いシンポジウムだったと思います。（黒沢先生のおっしゃる通り、一歩です）　午前中、障害者のゆめ国体の開会式に三時間身をゆだねていました。（寒くて寒くてかたまったが、心はあったかです）　周りが障害者の中にいて、自然とゆったりとなる自分があり、違いを認め合うことな大切さを感じた。（人としては同じ）　しかし、主催者側の挨拶が三ツ（岡崎知事・二人の市長）、岡崎知事の短的な話は最初だったのでなんとか心に入りましたが、二人の話は参加者を前にしているようには思えない心に響かないものでした。どうも個性が見えない大人の見本でした。

だからこそ、奥山先生のおっしゃる進路選択に際して自分ありきの教育等を論議し合う糸口になった三者のシンポジウムはよかったと思います。

過日、三浦半島の母・女の会で、高校生のシンポジストが、

「生徒一人ひとり（子ども）を尊重して欲しい。そうしてくれた教師を尊敬している。思ったら実践して欲しい。大人は攻撃を恐れないで欲しい。そうしないと学校も社会も変わらない」。

中学生シンポジスト

「信頼して任せて欲しい。失敗したらフォローする教師でいて下さい。それが分かる時、私達は大変だが頑張れます。大人がいきいきしてくれることが、私達がいきいきできることです」。

自分を持っている二人（良く知っている子たち）は、今の学校で生きづらいのも現実です。

ゆめ国体の「あなたに拍手・あなたと握手」を三者と私達参加者で実践し、よりよい社会になる努力をしたいものです。（石田先生、化学の授業がんばって下さい。数年後に出所してくる子を教えて欲しいです。奥山先生、先生個人の考えがもっともっと広まるといいと存じます。でもむずかしい）

16　高校教育改革について、今日の様に行政の方をおよびできたのは、よろしいかと存じます。できたらXXX、構想検のメンバーの多くの人々や、各学校の管理職、一般の先生、ＰＴＡ（保護者）、地域の人々、そして現中学生などの子ども等、多様な人をおよび下さい。

17　今日のシンポジウムを聞きながらぼんやり感じたのですが、「今日の本題ではない」のかもしれませんが、“学力”のとらえ方に問題がありながら論議されないまま、「学力偏重」とか「学力は高くても人間的に豊かでない子」とか、「勉強ばかりでかわいそう」とか、発言の中にありましたが、ちょっと「学力」とは何か、再検討した方がいいのではと思いました。

18　県教委と原簿の教員との実感に差がありすぎると思う。

19　なかなか進まぬテーマですが、ぜひ行政との対話を企画してください。

20　学力と人間性は絶対イコールにはならない。しかし自己の能力に気付くためには他者との比較が基本になってしまう。学力以外の支店を大人がしっかり築いていかないと、自信のない子どもばかりが増えていく。

21　入試方法の問題点を明確にするまでは至らなかったことは残念です。しかし、テーマが狭いので難しいですが。

22　又、実施して欲しい。

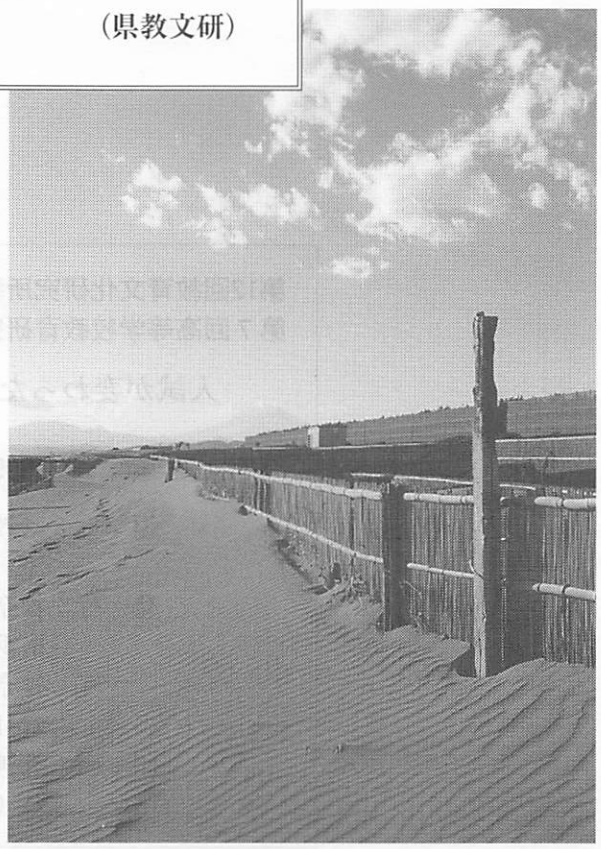
神奈川県教育文化研究所（県教文研）は、神奈川県教職員組合が主任手当の拠出金の果実を基金として、1980年に設立した研究機関です。

県教文研の目的は、「県民の立場にたって民主教育と文化を確立するための理論的並びに実証的研究と全県的な教育と文化運動を展開し、県民の教育文化の向上に寄与する」ことです。「教育シンポジウム」の開催も、目的に添った県教文研の具体的活動の一つです。

「教育シンポジウム」では今日的な教育諸課題をテーマとしています。そして、「教育諸課題」をめぐって、保護者・県民・教職員、研究者等で、その現状やあり方、課題について議論し理解を深め合ってきました。県教文研の活動が、神奈川の教育と文化のさらなる前進の力として生かされることを願っています。

「第12回教文研教育シンポジウム」開催にあたっては、共催を頂いた県立高等学校教育会館・教育研究所の杉山宏さん、中野和巳さんをはじめ、横浜市教育文化研究所の小畑義夫さん、畑健一さん、長部泉さん他、多くの方々にご協力を頂きました。厚く感謝申し上げます。

（県教文研）



湘南、茅ヶ崎海岸

第12回教育文化研究所教育シンポジウム記録
第７回高等学校教育研究所シンポジウム

入試が変わった！高校はどう変わる？

1999年３月９日

編　集：県教文研事務局長
　　滝　沢　　博
発　行：神奈川県教育文化研究所
　　横浜市西区藤棚町２－197
　　神奈川県教育会館１階
　　☎・FAX 045－241－3497
印　刷：㈲神奈川教育企画
　　☎ 045－253－3435